

ふくしま再生の会

第13回活動報告会 記録

これから5年 飯舘村村民の思い

過去に学び未来につなぐ創造的協議を

2016年10月23日

東京大学弥生講堂アネックスにて

特定非営利活動法人ふくしま再生の会

これから5年 飯館村村民の思い

私たち、ふくしま再生の会は、福島第一原発事故後2011年6月以来5年余にわたり、全村避難後の福島県相馬郡飯館村において、村民・ボランティア・専門家の協働により、放射能・放射線の測定、各種除染の方法を継続しつつ、帰村後の生活と産業の再生の総合的な試みに取り組んできました。活動開始から5年余の節目に、第13回の活動報告会を開催しました。

飯館村村民は、来春の避難指示解除を前にして、様々な思いでこの節目を乗り越えようとしています。この重要な時に、ふくしま再生の会の協働活動を支えてきた村民・ボランティア・専門家、さらに福島原発事故被害地の今後の再生・発展に関心をお持ちの多くの方々にお集まりいただき、事故後の活動を振り返り、今後の活動の方向について協議しました。

これまでの私たちの協働活動から得た経験に基づき、本報告会は一方向の活動報告に終わらせず、過去に学び未来につなげる創造的な検討の場にしたいと考えました。

そこでは、過去の活動を通じて得た事実について話題提供する人、現在の課題を乗り越えるためにやるべきことを具体的に提案する人、これらの活動を支援し周りに呼びかけたい人、など多彩な参加者全員の発言の場を確保するという新しい会合イメージを創り上げたと考えています。

福島・飯館村に山積する困難な課題に取り組まざるを得ない人々の議論を深める会にしたいと考えて、会場の座席配置デザインなども斬新なものを考えました。

過去・現在・将来に福島に、何が起こったか、起こっているのか、起ころうとしているのかを認識し思考する多くの皆さんに対し、皆様の協力でオープンで創造的な報告会が開催できたことを感謝申し上げます。

本パンフレットは、この報告会の全容を、さらに多くの方々へ正確に伝えるために、参加者の発言を忠実に再録いたしました。同時に、当日の映像記録もご希望の方に配布する予定です。

2016年11月24日

認定NPO法人 ふくしま再生の会 理事長 田尾陽一

< 目次 >

第1部 開会 主催・共催挨拶	2
第2部 議論	8
課題1 百姓・牛飼いの復活	8
課題2 山林を生かし、自然エネルギーを活かす	15
課題3 健康に生きる	21
課題4 再除染を進め、長泥地区を再生する	26
課題5 これから5年「までの村づくりをどう再生するのか」	30
まとめ	34
巻末資料	



第1部 開会 主催・共催挨拶

(1) 主催者挨拶



田尾陽一
ふくしま再生の会理事長

田尾陽一 定刻となりましたので、報告会を始めたいと思います。今日はたくさんの方にお集まりいただき、どうもありがとうございます。今日の報告会は13回目となりますが、村民の方たちをお迎えして椅子

を円形にならべてお話し合いをする形で進めたいと思います。

私はふくしま再生の会の理事長の田尾陽一です。今日は飯舘村の村民の方が12名来られています。それと村役場の方が2名で合計14名の方が来て下さっています。それと県庁からも1名来ていただいております。聴衆の方の中にも福島から参加の方がいらっしゃると思いますが、今前の方に座っていただいている計15名の方を中心に議論を進めたいと思います。

まず、話し合いに入ります前に主催者を代表しまして、再生の会の福島代表で副理事長でもある菅野宗夫さんからご挨拶します。



写真1

菅野宗夫 それではただいま紹介いただきました副理事長の菅野宗夫です。本当に皆さんにはお世話になっていまして感謝申し上げます。

最初に村の現状をお知らせしたいと思います。本来、飯舘村はこの時期、

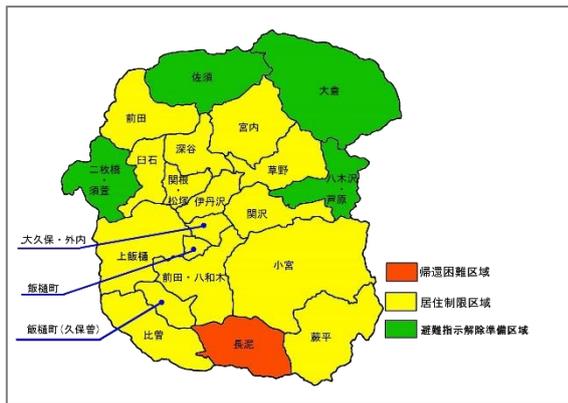
収穫の季節、実りの秋を迎えまして、五穀豊穡を感謝の気持ちを表しながら、収穫祭などのお祭りなどが行われました。なんというか田舎の良さを味わいながら、生きがいを感じながら生活していた村でありました。そして紅葉も今がきれいな時期です。それが、現在の飯舘村がどうなっているかといいますと、このように(写真1)フレコンバックの山が積みあがっておりまして、これだけとっても復興の難しさを目の当たりにしているところでございます。

この5年間の避難生活、大変な状況が日常というのが現実です。まったくコミュニティを含めて大変な状況を抱えて、日々暮らしているという生活ですが、なんとか乗り越え自立再生しようと頑張っているところであります。

今後、どこで、どんなふうに取り組もうか、自立しようかなど、考え方はさまざまですが、どれをとっても間違いではないと考えています。飯舘村は、このように230平方キロ(図1)という広い村ですが、来春の解除に向けて、長泥地区を除く約5600ヘクタールが対象面積ということで除染も現在進められております。この他にも、解除後の復興に向けて様々な取組がなされています。



菅野宗夫
ふくしま再生の会副理事長



飯館村における避難指示区域の解除について

平成28年6月17日
原子力災害対策本部

1. 東京電力株式会社福島第一原子力発電所事故に伴い、飯館村において設定された居住制限区域及び避難指示解除準備区域について、『原子力災害からの福島復興の加速に向けて』改訂（平成27年6月12日 原子力災害対策本部決定）における避難指示解除の要件を満たすことから、解除することを決定する。
2. 上記1. の解除は、平成29年3月31日午前0時に行う。
※ 上記の解除後の避難指示区域の概念図については、参考1参照。
※ 避難指示解除の要件については、参考2参照。
3. 本決定を踏まえ、飯館村長に対し、別添のとおり指示を行う。

以上

図1 避難指示地域の解除についての文書

図1のように原子力対策本部が来春解除を決定されたということで、現在、長期宿泊が許可され、7月から実施され、家に帰って泊まる人もいます。私も一応申込をして、いつでも泊まれるように申請しました。積算線量計のDチャトルをこのように身に付けて、そこから得られたデータを自分なりに判断できる材料にしたいと考えています。見えないものが見える化することが大事だと思っております。

農業の再生に多くの方が踏み出せないでいる中で、動き始めた人たちがいます。今日もここにお出でになりましたが、山田猛史さんもそのひとり、事故前の経営を避難中も継続して行っています。飯館村に戻ってもすぐ自立できるようなそういう取組をしまして、地域の先駆的な存在です。もうひとり同じ部落の高橋日出夫さんも今日、おいでいただいておりますが、写真2の奥にハウスが



写真2 関根松塚地区 ハウス栽培、放牧、太陽光発電に取り組んでいる場所

みえますが、それが高橋日出夫さんの大型ハウスです。この大型ハウスで花卉栽培に取り掛かろうとしています。ここの写真、手前のところが山田猛史さんの田圃で、放牧を予定して実証試験の準備をしています。そしてその道路をはさんで左側が太陽光発電というふうに、農地をそれぞれブロック化して、活用して行こうという地域をあげての取り組みを前向きにしている地域でございます。

これ（写真3）はイグネの材料を活用して自分の家を造っておられます。材を使用することによる線量はそれほど影響がないということですが、今日ここに菅野クニさんもおいでになっていますので後でお話を伺えると思います。



写真3

これ（写真4）は私の所でのそれぞれのハウス栽培風景です。土を使わないで軽石を使つての点滴養液栽培。



写真4

もう一カ所は除染した後のハウス内における土耕養液による作付試験、それぞれできるものを皆で取り組もうということで実証栽培をしております。(写真5)



写真5

私も来年の営農再開に向けて今、ハウスの建設の設計に着手したところです。このように一歩踏み出した人もいれば、帰れなくてそれぞれ自分で悩みながら対応している人も数多くいます。さまざまな人がいるということをご理解いただきたいと思います。このような大変な状況を乗り越えてこれからの5年、そしてその先を村民自らが一体となって取り組んでいかなければなりません。飯舘村というのが暗いイメージで知れ渡ってしまった村ですが、なんとか大変ではありますが、明るいイメージのメッセージが発信できる飯舘村に、ゆくゆくはして行きたいという希望がやはり大事なかなと思っています。

そんな中で「ふくしま再生の会」の活動ですが事故直後の6月に設立いたしましたもうすでに5年半が過ぎたところでございます。この間それぞれみんなで知恵を出し合いながら、「ふくしま再生の会」は生活と産業の再生の試みを大事にしながら、取り組んでいます。被災地の現地で被災者と

協働して継続的にということで、皆で頑張っているところです。大事な大事な交流人口の人達だと私は強く思っています。本当にこれからも一緒になって生きることの大事さ、自然との共生の大事さ、そういうものを一緒に考えながら対応していただければと思っています。



写真6

これ(写真6)は様々な会の活動の主なものです。避難先の心のケアやそれぞれ若い人たち、特に大学生たちを受け入れや情報の発信、それから再生の試み、そして見えないものについての対応についてはモニタリングの実施などをして、得られたデータについては、高い、低い、あるいは食べられない、食べる、そういう判断を、それぞれの人が判断をする大事なものを提供するという基礎的データ採りを皆で一緒に行動して取り組んでおります。

このような形で活動しておりますが、今日ここに報告会を開催いたしましたところ、ここに多くの方々に参加いただいたことに感謝申し上げます。ふくしま再生の会の会員、そして専門家、そしてメディアを含めた人たち、一般の参加者、そして行政の方々、それぞれの横の連携で、要するに立場を超えて一緒に考えて行くこと、そして、「これからの5年を考える」意義は大きいものと思っております。以上、飯舘村の抱える現状を申し上げ、この報告会が生活と産業の再生により一層近づきたいという主旨を申し上げて開会の挨拶いたします。本当に今日はよろしく願いいたします。

(2) 共催者挨拶

田尾 菅野宗夫さんから最初の話をお伺いしました。色々な問題を抱えている福島・飯舘村が一体になって今後、希望を失わないで再生に取り組んでゆくという主旨のお話がありました。

続きまして、ふくしま再生の会の副理事長・東大農学生命科学研究科教授の溝口さんから、本日の報告会の共催者である東大農学生命科学研究科の歴代の研究科長さんのご紹介をお願いしたいと思います。



溝口 勝
ふくしま再生の会副理事長
東京大学農学生命科学研究科教授

溝口勝 皆様こんにちは。今ご紹介に預かりましたふくしま再生の会の副理事長の溝口です。土日は副理事長、平日は東京大学農学生命科学研究科の教授と二つの顔を持っています。

私どもが東大農学部として、この「ふくしま再生

の会」の活動に参加をし始めたのは2012年の10月です。今回の原子力災害の事故の中で失われた一番のものは、大学の立場からいうと、科学技術に対する信用ではないかと思います。そういうなかで、農学部は実学を主にしているという自負がありましたので「この事態に我々がやらなくてどうするのだ」という気持ちでした。そこで、2012年の10月から学生を現場に連れて行ったり、現場の状況に応じて自分たちの持っている知識を最大限に活用する実践的な講義を立ち上げたり、現場重視の教育活動を続けております。こうした取り組みがスムーズにできたのは、農学生命科学研究科（農学部）の3名の研究科長が常に我々の活動をサポートしてくださったおかげです。そのうち長澤先生は本日中国に出張中なのですが、再生の会との関係では2代目研究科長で現在東京大学副学長の古谷研先生、それから3代目で現在

の研究科長の丹下健先生がこの場に来ておりますので、お二人からご挨拶を頂戴したいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。



古谷 研
東京大学副学長

古谷研 ただいまご紹介いただきました古谷でございます。私は2013年、14年とこちらの研究科長を務めまして、その折に田尾さんにお会いして、このような活動をしているという説明をいただいて、先ほ

ど溝口先生からお話がありましたように、結局、農学が一番活躍しなければいけない場であるという認識のもとに協力させていただいてきた訳でございます。

皆さまご存知だと思いますが農学生命科学研究科ではいわゆる放射能汚染の農地、海洋あるいは山林を対象とした農学現場の課題解決を様々な角度から図ってまいりました。そうしたことが一日でも早い復興に役に立つだろうという期待で、また皆様のそうした熱い思いというものをその度に感じているところでございます。

私は先日、三陸に行く機会がありまして、田老から南の陸前高田まで、ずうっと各湾の町を見てきましたが、その町ごとに復興のあり様というのは本当に違うんですね。あそこは大きな問題は津波です。津波被害からの復興はそのそれぞれの自治体の構造なり規模なり、意志決定が変わってくるのだらうと思います。大事なことは、コミュニティ形成している人たちが自己決定（自らの意志で決定）するということなのです。ですから湾ひとつ違ふと、どの位の高さの堤防にするかとか、盛り土をするかということは様々なのです。何が良いかという回答を誰も持ち合わせていな中で、それぞれが自分で決定してゆく、そうした経験というのは、否が応でもせざるを得ない状況ではあるのですが、（このような経験は）なかなかないだ

ろうと強く感じた次第です。一方、こちらの飯館村、福島の問題というのは、いわゆる自然災害に留まっていないというのが非常に大きい。むしろ今ご紹介がありましたように社会構造に関わるような人災である側面が大きいわけです。そうすると、より多くの関係する人々が、それぞれの力を出し合ってやって行かなければいけないということになるかと思えます。そういった意味で、今、廃炉に向けて色々な議論がありますが、その前に様々なエンジニアリングの立場から貢献してゆくことがあるだろうし、また多分、農学の今までやってきた部門以外にも関与をすることがあるだろうと思えます。

例えば、山林や野生生物の問題というのはまだこれから取り組むべき課題が随分残されていると私は思っています。そういった意味で、今日この場においてまた皆様の議論を聞かせていただいて、改めてこの問題を考えて行きたい、と思えます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。



丹下 健
東京大学農学生命科学研究科長

丹下 健 現在、農学生命科学研究科長を務めております丹下と申します。

私自身の専門は森林、林学で、造林学という山に木を植えて育てるといふ分野の研究をしています。農学部、分野としては非常に現場的で、実際の研究では基礎的な光

合成とか蒸散を研究テーマにしています。農学部の先生方も多くは現場というものを意識しながら、研究としては基礎的なことをやられている先生が多いと思えます。この福島の事故、津波と事故があって以降、そうした先生方が多数福島を含めた東北地方の復興に関わる研究に携わってこられました。やはりその基礎的な知識から今後の復興に向けてどういった研究が必要なのか、今の現状を知るためにはどういった測定が必要なのか、

ということを決えずにしっかり考えていただいて、それなりにこの5年間データを蓄積してこられたのだらうと思っています。やはりその基礎研究を行うことによって様々な応用が効いてくるだろうと思っています。セシウムとは、これからかなり長いこと付き合っていかなければならないと思えますし、私が対象としている森林について言えば、除染はほとんど行われていなくて、山から川を伝わって町や海にセシウムがどのように流れて行くかということも、モニタリングしている最中です。水に溶けて流れるということは少ないけれど、土砂などと一緒にセシウムが流れてくることが多い、ということも分ってきています。山に溜まっているセシウムが今後どうなるのか、それが将来の生活にどう影響するのかということも含めて将来的な予測、できるだけ確度の高い予測を今後も研究者はしていく必要があって、それに基づいて産業の復興とか町創りの計画を立てなくてはなりません。

大学としては「今」というだけではなく、将来、若い方がこういう取組に参加してゆく下地を創ってゆくことがこれからの課題ではないかと思っております。学生さんも多くの方が福島に関わり、活動に参加させていただいています。色々なことを考え成長する場として、学生も大いに刺激を受けていると思えます。その刺激を大学の期間だけに終わらせずにこれから将来に渡る長い期間、どういった意識をもって生きていくかということを生徒に考えさせることも大学としては重要なことと思えます。農学部ではそのような教育も含めてこれからも取り組んでゆきたいと思っております。

是非、皆様方の生の声、現状と将来についてお聞かせいただきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

溝口 ありがとうございます。歴代の研究科長の先生にご挨拶いただきましたが、実は、こうしたご理解があったうえで、この農学部の中では、飯館村で採取された土や植物などの試料がまず農

学部に送られてきて、それを農学部内の放射線の研究者、土壌の専門家、作物の専門家、それぞれが分担して分析してデータにして、それを公開しています。そうした成果を今日、あちらのポスターセッション会場にまとめてありますので、お時間があるときに是非ご覧いただきたいと思います。

まとめる過程でもうひとつこの農学部には特徴があります。それは、本当は自分たちも現地に行って活動をしたいけれども、なかなか行く時間がないという職員の方々が、自分の仕事が終わった後に集まって、飯舘村から届いた試料を試料容器に細かく分けて、分析する教員に渡すという作業をボランティアでやっています。「サークルまでい」というボランティア組織ですが、そうした協力や連携があってデータが「見える化」されています。そのあたりもポスターにまとめてありますから是非ご覧いただきたいと思います。¹

本日はここ東大農学部にお越し頂きありがとうございます。ついでに農学部の宣伝をしますとあそこにいるのが忠犬ハチ公と飼い主の上野英三郎先生の像です。実は私は上野英三郎先生が作った学科の卒業生として、飯舘村における農業の再生は、卒業生である私の使命と考えて取り組んでいますので、どうか今後ともよろしくお願い致します。

(3) 来賓紹介

三輪睿太郎さん／渥美国際交流財団／飯舘電力／高エネルギー加速器研究機構／行政福島県庁・飯舘村役場

田尾 さらに今日ご参加いただいた方をご紹介します。農林水産省農林水産技術会議会長さんを歴任され、我々も専門的なところで随分ご支援いただいています三輪睿太郎さんです。

三輪 どうもありがとうございます。どうぞよろしく願いいたします。

田尾 さらに本日の報告会后援をいただきました飯舘電力株式会社と渥美国際交流財団をご紹介します。飯舘電力株式会社小林稔社長さんです。渥美国際交流財団からは、今西淳子専務理事と角田英一事務局長が来られています。ありがとうございます。

それからこの5年間、飯舘村の環境放射線の連続測定について各種の放射線測定器システムを私たちに使わせていただいて校正とか管理をやっていただいている大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構（KEK）から佐々木慎一共通基盤研究施設長と石川正准教授がおいでです。私どもの測定車で毎月1回各地区2人ずつの村民40人が4年間全村の放射線測定を展開しています。パンフレットにも紹介しております。その高性能放射能測定器をKEKが提供しております。その他各種の計測器を提供していただいて今後どうするかという議論を今やっているところでございます。ありがとうございます。

田尾 本日は福島県の住民でもあると思いますが、福島県庁から農林水産部農林企画課の戸城主査においでいただいています。県庁の立場から議論に参加していただきたいと思います。それから飯舘村役場から復興対策課の中川課長と羽田さんに来ていただいています。

中川 どうもこんにちは。よろしくお願いします。

田尾 たくさんのお酒も差し入れていただいておりますので、後で賞味させていただきますと思います。

¹ 巻末資料 サークルまでいの活動

第2部 議論

課題1 百姓・牛飼いの復活

田尾 早速議論に入ります。ご案内のチラシのなかに課題が書いてありますが、その順序でいきなすと思います。課題1から5までありますが、最初が「百姓・牛飼いの復活」、2番目が「山林を生かし、自然エネルギーを生かす」、3番目が「健康に生きる・コミュニティの再生と健康見守り」、課題4に「長泥地区を再生する」、鳴原地区長が来られています。課題5の「これから5年、までの村づくり」で、この総括的な議論を皆さんを含めて展開していきますが、比曾地区から菅野義人さんが来られておりますのでお話いただきます。村民の立場でいえば全部がご自分のテーマなのですが、参加の皆さんには少し絞りながら、現状やこれからの5年について忌憚のないご意見をまず言っていただいて、質疑をしながら進めていきたいと思ひます。

最初に課題1の「牛飼いの復活」について山田猛史さんからお願いします。関根松塚地区で田圃を放牧場に変え、来春から牛を6頭放すぞというお話です。私たちは牧柵を作るお手伝いをする事になっておりまして、県庁の方からもこれについて支援があるというお話です。そのあたりの現状と展望を猛史さん、お願いします。



山田 猛史
飯館村村民
関根松塚地区 牧畜業

山田猛史 こんにちは。去年も報告会に参加しました山田猛史と申します。私の今までの5年は、あんまり変わっていないという村民もおられると思ひますが、私は毎日毎日、前を向いて変わっております。当時、避難したときには牛20頭を連れて

中島村に避難しましたが、今は38頭になりました。避難したときは年寄り組の俺と女房と母親と

年雇いの老人組の4人でしたが、今は息子ら夫婦と孫が帰ってきて大分活気づいて、今年の2月まで私が中心に牛を飼っていたのですが、今度は息子が中心に、正真正銘の息子に使われて今、手伝いをしております。

ですから今、写真（写真1）が出ている飯野の牛舎は息子が中心になって牛の管理をしています。私は下の写真（写真2）の、田んぼのある飯館に行つて飯館の作業が私の仕事場になっております。



写真1



写真2

さっき理事長からありましたが、今月の31日から11月1日2日の3日間にわたつてこの田圃で放牧をするための牧柵を建設する計画で、畜産試験場からもかなりの人数が来て、「だれか人がいませんかね」という話だったので、再生の会で何か仕事をしたいという人がいっぱいいるというから、再生の会の方に話をし、是非お願いしますということにしました。特に体力のある方をお願いしたいということでしたのでひとつよろしくお願ひします。

私は、当初から村に帰つて来るのだという考えで、牛飼いを止めませんでした。以前は、私の集落にも8件の畜産農家があったのですが、残つたのは私だけですし、これから帰つて来てからも、

この農地で百姓をやろうという人はそんなにいなくなるんじゃないかなと思っていましたから、この水田だけはなんとか活用したいと思っていました。あの頃、冗談で、この田圃が60町歩だったのですが、それで、「俺の思いのままに使えるな」と冗談話をしていたんですが、現在まさにその通りになりました。20町歩はソーラーで埋め尽くされているのですが後40町歩、高橋日出夫さんのハウスを除いて、だれも手を挙げて何をしたいという人がおりませんから、取りあえずは、まあ私の方の牛に食べさせる草を作って、それから何年か過ぎたら「じゃあ俺も何かやりたいな」というような人がいたら、その土地を返すみたいなこと、農地を守りながら自分の生活の糧にしたいなと思っております。それから、息子は肥育もしながら、行く行くは、直ぐにでも肉屋さんをやりたいと言うもので、一貫経営の畜産農家になるのではないかなと思っています。そうしたら飯舘は仔牛採りの繁殖ゾーンで、今やっている飯野は肥育の牛舎になるのではないかなと思っています。そうして住み分けをすれば、風評被害もやや和らぐのではないかなと思ったりしております。そんなことで田尾さん31日よろしく申し上げます！以上でございます。

田尾 ありがとうございます。猛史さんが放牧するというので我々も張り切っています。二宮さんが今募集をしていますので、体力のある人、側で見ていたいという人は、事務局に申し込んでいただきたいと思います。

ここで牧草の種を蒔くというお話もありますし、私たちとしては猛史さんの土、地面の下がどうなっているか徹底的に調べています。今から溝口さんに話してもらいますが、環境省は畦を除染しないのです。私たちが測ると畦の土の放射能は高いのです。それをどうするかと猛史さんと協議して畦をその側に埋設する工法を実行しました。今後、牧草が生えてきたらその放射能を測定する。これを「サークルまでい」に送って、それを牛が

食べるとどうなるかということも調べたいと思っています。私は猛史さんに申し込んでいるのですが、ときどき一頭食べたいが、解体して全部位を測定するということが目的です。飯舘牛を復活して消費地に送ることもやりたいので、バーベキューにして食べさせていただきたいと思っています。その計画について、牧場に作る田んぼの下はどうか、溝口さんから報告をお願いします。

溝口 再び溝口がお話します。資料は「除染直後の松塚の土の状態」²です。除染直後の土がどうなっているかを調査しましたので、それについてパワーポイントを使いながら簡単に報告したいと思います。



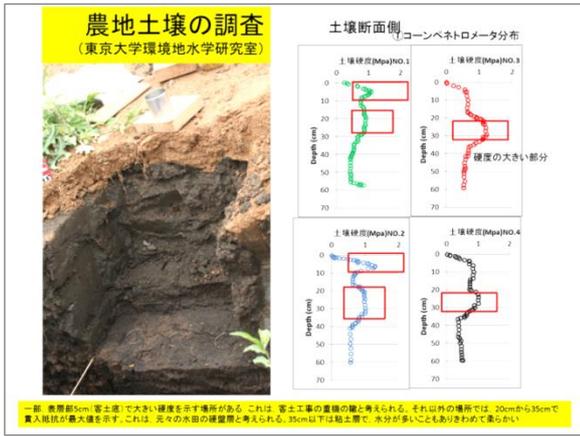
写真3

写真3は今日の松塚の山田猛史さんの田圃です。ICT技術を使って毎日現場を見えるようにしてあります。左に映っているのが、高橋日出夫さんのハウスです。今はこのように耕耘されていますが、除染直後は雨が降った後はこんな風に水たまりになりやすくなっています。(写真4)



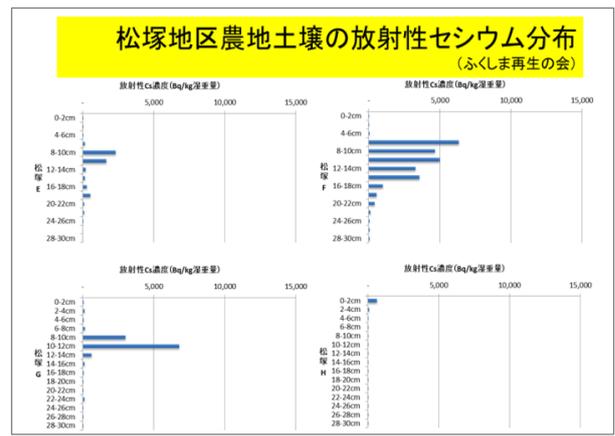
写真4

² 巻末資料 除染直後の松塚農地の状態

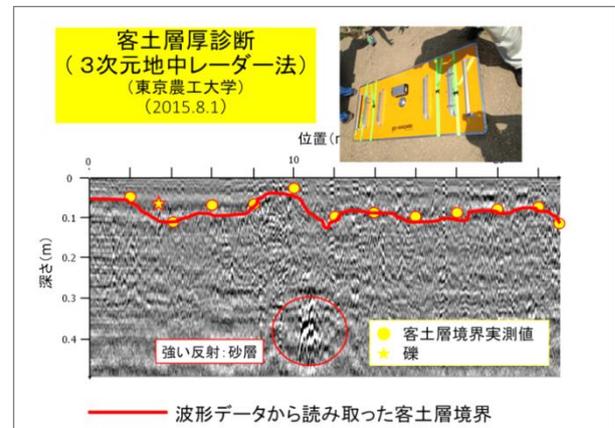


このスライドの穴を掘った写真のちょうどこの上に見える黄色っぽい土、これが客土です。もともと黒い作土層の表土を除染で削り取った後に、この黄色い砂をかけたのです。今、ほとんどの水田がこういう状態です。右の図を見てください。この土の硬さを測りますと、20～30cmのところちょっとコブがあるのが分ると思います。これはもともと田圃にある硬盤というものです。田圃というのは水が20～30cmのところを通りにくくなって、水がじゃじゃ漏れにならないようになっているのです。ところが、注目していただきたいのは左上の5～10cmのところ。コブがもうひとつできています。これは、たぶん除染で重機が入った時に固めてしまったところです。このように二重のコブ、2つの硬い層があるために、先ほどのように雨が降ると水が抜けないという状態になっています。こういう排水不良の状態の農地に牧草の種を撒いても多分育たないので、ここをなんとかしないとイケないですが、流石、山田猛史さん。その辺はとうに見破っていて、サブソイラーという機械で深く耕すことで2つの硬い層をなくしているのです。そのため、この田圃だけが大雨が降っても水がそれ程たまっていない状況を確認しています。次お願いします。

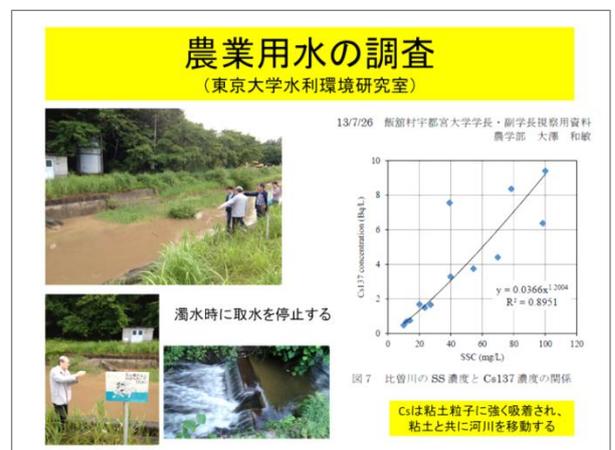
除染はうまくいったのかという図です。上から5cmとか10cmのところは確かにきれいになっている。つまり一番汚染されている土は確かに取れていますから多少は残っていたとしても、これを耕耘してしまえば、牧草が根を張ってもそれ程影響はないだろうと私は考えています。次お願いします。



これは、最新のエコー型の機器で、どれぐらい客土が被っているかを調査した結果です。結構凸凹していますが、混ぜてしまえば多分大丈夫だろうと判断しています。次お願いします。



もうひとつの問題。それは今飯館村で田圃をやるという人がいないことです。実はいざ田圃を使おうとした時、大事なものは水を田圃に入れることなのですね。しかし、飯館村内では、農業用水・農業排水路については全然手つかずの状態です。

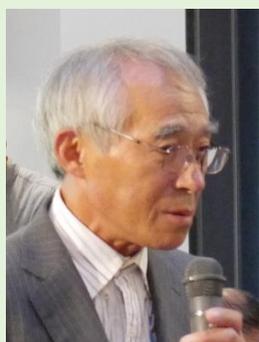


折角（田圃を）きれいにしても、農業用水路からセシウム入りの水が流れてきたら何のための除染だったか分かりません。ですから早い段階で農業

用水路をチェックしておく必要があるのですが、現時点でそれは一切行われていない。昨年東大の農業水利研究室で水源の調査をして、大雨のときに泥水が流れださないような仕組みが必要と考え、それを研究しています。しかし、これから先果たして、農業用水路、排水路を整備する人達がいるのか、という問題が依然として残っています。

最初のスライドに戻ってください。(写真3) 先ほど、田尾さんから話がありましたが、畦畔は除染されていないのですね。でも、この田圃で山田さんが畦畔の横に深さ1mくらいの穴を掘ってフライパンの卵焼きを返すような形で汚染された畦畔の部分を埋め込んで、何もなかったかのようにこのようなまっ平なきれいな農地にしているのです。そこで牛を飼いましょう、という話になります。実際に牛飼いをしたり、農業を復活するためには、こういった農地の現状を理解して議論することが必要です。以上、報告です。

田尾 非常にたくさんの方に色々なお話をしてもらいたいで、ひとり3分以内といったような目安でお願いしたいと思っています。何度もお話いただくようにした方がよいと思います。小林稔さんに牛飼いの復活のお話をいただきたい。飯館電力の社長さんですが、飯館電力の話は後でやるとして、畜産の復活について何かございますか。すでに蔵王の方で牛を飼っていらっしゃる、息子さんと一緒にやってらっしゃるとのことです。



小林 稔
飯館村村民
飯館電力株式会社代表
取締役社長／農家

小林稔 紹介いただきました小林と申します。飯館村から今日は14、5人来ているということで、やっぱり知っている人がいるというのは心強いものですね。こういう場で話をさせていただくというのは、場違いな感じがして大変恐縮しておりま

す。しかし今、田尾理事長の方からお話があり、お世話にもなっておりますので我慢して話しをさせていただきます。

私の話すことは山田猛史さんがさっき言ったことと重複する部分もあり、また、まるっきり逆の部分もあると思います。その辺のところを話してみます。私も避難前から米と牛をやっております。米がだいたい11町歩、牛も和牛一貫で30頭近くおりました。避難してからも牛はずっと続けております。今は宮城県の蔵王町というところで30頭規模でやっています。そこは息子が最近結婚しましたので、息子に任せて私は喜多方で酒米作りをしています。そして、来年飯館でまた牛飼いを始めるために準備にかかっております。喜多方での酒米作りは、飯館村の「おこし酒」を復活させるためにということで、平成24年からやっておりますが、まだこれは当分続けなければいけないのかなど、ですからこれからも飯館村と喜多方との往復がかなり続くと思っておりますが、体力の続く限りやり続けようと思っています。飯館の牛飼いです、私は肥育をやりたい。かなりリスクは高いと思いますが、でも、私の年齢になれば、そういうリスクを負ってもいいのではないかと、飯館牛を復活させるためには肥育をしなければこれはダメなので、飯館村で栽培した牧草がだめであれば、他所から買ってやってもいいし、避難してからは殆ど輸入牧草とかを使ってやりましたから、その点は問題はないのですが、ちゃんとした建物の中で、放射能の影響を受けないという環境の中で飼えば、私は大丈夫だと確信しております。そんなことでやっておりますけれど、問題は牧草が果たして安全かどうか、そこは来年にならないと分からない部分でありまして、後、稲わら、これは他所からも運ぶ、例えば蔵王から集めて運ぶ、後は喜多方でわらを集めて運ぶ、ということになると思いますが、そうすると今度は経費の問題が出てきて、なかなか悩ましいところでもあります。でも、私は息子と別の生き方をしようになるのかなど避難当初から息子のことを考

えて場所を確保して、生計が立つような取組をしてきたので、今度は自分の思う通りのことが出来ると思って、避難解除に向けての取り組み、こちらを重点的にやっていきたいと思っています。どうぞ再生の会の協力もよろしく願いいたします。

田尾 猛史さんと同じ関根松塚地区でさっき写真に出ましたハウスがもうすでに建設されていますが、高橋日出夫さんからお願いします。



高橋 日出夫
飯館村村民
関根松塚地区
花卉栽培農家

高橋日出夫 松塚地区で農業をしておりました高橋と申します。よろしくお願いします。

今、現在は福島市の飯野町というところで、山田猛史さんの牛小屋のある近くでハウスを作って、トルコキキョウとストックを栽培しております。

避難する前は、村ではブロッコリーとかグラジオラスとかトルコキキョウとか、後は、冬に小松菜など色々、複合営農をしておりました。災害がおきまして避難して2年はアルバイトをしていたのですが、1年の終わり頃に村で、「避難先に農地を見つけた人にはハウスを作って貸すよ」という事業がありまして、すぐに農地を見つけて手を挙げまして、ハウスを作っていたいただき、今年で4年作付けをしました。



「帰村が29年3月にできるよ」ということを聞いて、すぐに手を挙げて、村にハウスを作って切り花をしたいという申し出をしました。すぐに、「いいよ」という返事が返ってきまして、3間半×20間のハウスが7棟ありまして、6棟で切り花をして、1棟は苗を作るハウスです。4棟がトルコキキョウ、2棟がアルストロメリアです。それから離れたところに2間半×20間のハウス2棟がありまして、それはカスミソウを新しく村でも力をいれてやりましょうということで、私も手を挙げまして私の地区で後4人の方が賛同しまして、今、ハウスを作っています。来年の3月からは私の地区では切り花の栽培が始まります。7月からは出荷もできそうです。



色々、行政の方にはお世話になってます。再生の会の皆さんにも何回も何回も放射線量を測っていただきまして、私の所はこの数字ならば安心して作業できるなど、私自身は思っております。後は女房も「どうしたら楽しい暮らしができればか」といったら、やっぱり前のように村に帰って好きな花作りをした方がストレスもたまらないし、「健康にいい」というのは変ですがストレスをためないのが、放射線を考えるよりすごくいいことだと思っております。以上です。

田尾 ふくしま再生の会は、佐須地区の宗夫さんや永徳さんのところで大永さん、竹迫さんたちがハウスづくりを手伝ってきました。明治大学の竹迫さんたちは明大ハウスという名前を付けて宗夫さんの敷地で、いろんな野菜を試験栽培しています。竹迫さん、お願いします。



竹迫 紘
明治大学農学部 元教授
農学博士

竹迫 紘 トルコキキョウをはじめとする花の大規模なハウス、色々なものを拝見いたしました。飯館の農業が「これは絶対に再興して行きます」、そのためには、先ほど東京大学の方から「農学が支える」という話がありました。私も、明治大学で

農学部において一昨年リタイアしましたけれども、それ以前から助成に関わっておりましたが、同じ思いで、宗夫さんの方に名前は「明大ハウス」という名称でできております。インターネットを使って遠隔操作のできる、養液を点滴で供給する装置を導入して、省力化と施設園芸の技術移転を比較的現地の方に容易に、簡易に伝えて行きたいという作業を、この宗夫ハウスを通じながらやっておりますけれども、今後とも継続して支援をしてゆきたいと考えております。以上です。

田尾 二枚橋の佐藤文男さんはハウスをおやりになるお気持ちはあるのですか。



佐藤 文男
飯館村村民 会社役員

佐藤文男 今回、飯館村から初めて参加させていただき、一番若いのかなと思っております。私の夢だったのですが、一避難する前のことですが一家庭もございまして、子供が大きくなるまでは兼業農家で続けようと、その時に思ってたのが、やはり、食にするもの、安定したもの、といいますと、具体的に言いますとシャクヤク、苗の方は製薬会社と提携して経営のビジョンを立てるのもいいかなという構想もあ

たりして、いろいろと夢を抱いていました。ところがやはり避難という形になって、その夢もどう

なるのかなという形ではあります。今後、再生の会の皆様の協力で、そういったもののデータがあれば、また食にするもの、まだまだ、掘れば掘るほど色々な形のスタイル、経営ビジョンが出てくると思います。私の方は今、もうちょっと会社の方の勤めがあり、思案しながら今後の農業の経営、どういう形になるか分からないですが、最終的には小林さんも言っているように、年も年だから多少のリスクはいいかなという形であれば、またそちらの方に復帰したいと思いますので、その辺のデータもよろしくお願ひしたいと思います。

田尾 佐藤文男さんは、そこにいる小原君と北村君が、大雨の後、放射線を測りながら牧場を車で走っているときに、車が溝に突っ込んで身動きが取れなくなったことがあります。「つっぺる」という言葉があるのですが、まさに「つっぺって」しました。その時に宗夫さん永徳さん私も駆けつけて、携帯で文男さんと呼んだのです。そしたら、ユンボをトラックにのせてすぐに来ていただいて、日没直前に川のようになっているところを排水しながらその日の内に車を助け出してくれました。凄まじい機動力の持ち主です。都会だと三日や一週間かかりそうなのですが、二人はその日の内に東京に帰ることができました。ちょっと余談でした。先ほどからハウスのお話がありましたが、県庁・村役場から支援があるという話がありました。県庁の戸城さんからなにかコメントがありますでしょうか？



戸城 和幸
福島県農林水産部
農林企画課主任主査

戸城和幸 先ほどご紹介いただきました福島県農林水産部の戸城と申します。先ほどお話のあったハウスは、村の計画にのっとってハウス等を作る方には、元々は国の事業なのですが、再生加速化交付金というもので、

村に対しては4分の3補助なのですが、後ほど交付税措置がありまして、実質、村の負担、そして村民の負担ゼロでリースしていただくという事業を作っていました。飯舘村さんは比較的こちらの事業を活用していただきまして、勿論村民の皆さんもやる気になっている方々がいっぱいいらっしゃるということで、活用をいただいているということでございますが、そういった市町村で計画を作って10分の10でという事業になりますと、どうしても公的なハードルが高いということで、商工業の方はこの4月から補助事業ができたのですが、そこまで村の計画にのっとった事業じゃなくても、戻って商売をやりたいという方には、4分の3の、かなり今までの事業から比べると高率の補助事業ができたんですけれども、農業の方にも今回の国の2次補正で、そういった4分の3の補助事業を付けていただきました。例えばトラクターですとかハウスですとか、それから今までは再生加速化交付金の方では対象になっていなかったのですが、牛を買う費用を補助させていただく、というようなことを我々と村さんなんかと一緒に国の方に要望したところ、付けていただきました。かなり高率の補助事業を作っていましたので、これから国の要綱、県の要綱なんかでもできるだけ皆さんの使い勝手のいいような制度にしていきまして、我々の方もそういったやる気のある皆様にサポートして行きたいと考えております。

田尾 村役場の方から中川さんお願いします。



中川 喜昭
飯舘村復興対策課長

中川喜昭 あらためましてこんにちは。飯舘村の方で復興対策課長をしております中川と申します。再生の会さんとは、先ほどありましたように、23年の8月頃から村に来て放射能による状況を確認

認していただく中で、村としても村民の方々にきちんとした状態でのその時点、その時点での放射線量、空間線量ですね、放射線量をやはり、知らせるべきだということで、再生の会さんに委託という形でお願いしながら、今年度も続けてやってきている、という状況でございます。そういう形で再生の会さんの方々には大変、飯舘村の復興再生には支援をいただいているということで、この場をお借りして感謝申し上げたいと思います。

それで今、今後の村の営農再開という部分で、県庁の戸城主任主査さんからもありましたように、村としましては23年の12月頃だと思っておりますが、まだ、どんな風になって行くか分からない時点の中で「村に戻ったら農業をやりますか？」と村の方々、農家の方々に聞いてみると、村に戻ってやりたいという方が13名意向調査で出ました。それで24年になりまして、そういう方々、やる気のある方々に避難地で営農再開ができるようになれば、それまで培った作物等の技術とか、後はやる気の継続、この2つを避難した中でも保って行って欲しいというのが、当時の村の思い・願いでありまして、まずはやる気のある方々に、まずは支援することにしようということで、当時復興局の方から駐在していた職員の方をお願いしまして、避難地でも国の復興交付金を受けてやれる項目を作っていたというものが、これまで福島市、那須塩原、喜多方、県内外でやれる方々に、先ほど話がありました村が事業主体になって農家の方々に施設をお貸しをするということで進めてまいりました。途中から県の方が今度は間に入っていただきまして、県の方とも協力しながら進めております。かなりの方々が避難地においても再起をしておられるということです。それで、今県の方からも話がありましたように避難先でやっていたものが、村内でもできるということで、今回、高橋日出夫さん、後は水田の放牧実証ということで山田猛史さんがやられる。で、その為の機械導入が必要ということについても再生加速化交付金でやっているところです。来年度

に向けても是非ともやる気のある方々を支援して行きたいということで、農家の方々に意向調査をして、もし計画・見積等が出せるのであれば、村の方に提出をお願いしたいと29年度から実施できるように村としても頑張りたいということです。その中で30数件の方々が見積書等を出していただいて、今のところの総額であります14億円の事業費ということになります。それで、先ほどの県の方からありましたように、新たな補助事業ということで4分の3事業、4分の3を補助する事業が出てきたということで、今後、その30数件の方々に村の方では、どういう意向でやられるのかというヒ部分をアリングをしながら、支援をしていきたいなと思っております。ですので金額がかなり嵩張るものについては、今まで村がやってきた村が事業主体の加速化交付金の補助事業で、後は小規模のグループ、補助額が1千万までが出るというもの、村の復興計画の中にその計画があれば3千万円までが限度として出されるという事業であります。そういう意味でそれらを活用して今後来年度予算計上の時期でもありますので、ヒアリングをしながら支援をして行くということになります。以上です。

課題2 山林を生かし、自然エネルギーを活かす

田尾 ありがとうございます。村民自身の方が計画を立てて「こういうことをやりたい」という場合に村役場、県庁が支援するという力強いお話をいただきました。これについてご質問・ご意見がありましたらお願いします。一般の方、村民の方、何かございますでしょうか？ 次に行つてよろしいでしょうか？ 総括的にはまた最後に、課題全部が関連しておりますので何うことにします。

それでは課題2に入ります。課題2というのは「山林を生かし自然エネルギーを活かす」です。山林の除染はまだ手が付いていないのです。この間、私も中川さんとお話したり、県の方にもお話

したのですが、森林は、今2.5μSv/h以上のところには規制があって作業労務の方は入れないのです。私どもの経験では2.5μSv/hといったらすぐにオーバーするところがたくさんあります。私どもは業者ではないので計測のために山に入っています。森林の状態を把握したいと思っています。2.5μSv/hでは、調査を充分して何等かの森林再生方法を考えるということまでいかない規制ですね。中川課長とお話しても難しい問題だと思いました。なんとか県、村に、規制を緩めるというのではなくても、何らかの森林再生方法を見出す手法を考えていただきたいなと思います。林業の従業員は0.5μSv/h以上で入れないということになっています。ほぼ難しい数字です。業務としてやるなら確かに色々なことを考えなければいけない、何をどうやろうかという調査に対してはあまりにも厳しいと思います。私たちのような立場でもなかなか入りにくいし、科学者もなかなか入りにくいのではないかと思います。ということで、山林をこれから生かすにはどうしたらよいか、自然エネルギーを生かすにはどうしたらよいか、考えていきたいと思っています。自然エネルギーの利用も課題2にいられてあります。

最初は、小宮地区で「マキバノハナゾノ」を作っている大久保金一さんが来られるということになっておりましたが、今日来れないことになってしまいました。ふくしま再生の会はマキバノハナゾノの支援をやってきました。二瓶さんいらっしゃるのでしょうか、二瓶さんは東大の先生で我々は二瓶プロジェクトと呼んでいます、マキ



二瓶 直登
東京大学農学生命科学研究科 准教授

バノハナゾノの中でやっています。今の状況をお願いします。

二瓶直登 すみません。東大の二瓶です。よろしく申し上げます。私の方では、金一さんの圃場をお借りしまして大学と

して試験栽培をさせてもらっています。マキバノハナゾノというわけではなく大学でやっている試験の対応を説明させてもらいますが、ひとつは今年度、先ほど溝口先生からお話のあった農業用水、水の調査を始めています。山から流れてくるものとか、どのくらい田圃に入るかとか、どのくらい田圃から出るかという調査をさせてもらっています。金一さんの方で震災直後に作ったたい肥がありましたので、そのたい肥を圃場に入れ続けて作物にどのくらい移動するかというような試験をさせてもらっています。昨年までは大豆とかソバの栽培をさせてもらっていました。マキバノハナゾノについては、金一さんの夢というか願いでして、金一さん元々、桜、花が好きなので10年後20年後に今皆さんが集まってくることを目的として一昨年頃から桜を植え始めて、それを見るような人が集まるようなことをしたいということで花園にしたいということを目的としたもので金一さん主体で動いているプロジェクトがあるということです。よろしくをお願いします。

田尾 ありがとうございます。聡太君はどうですか。さっき、村民の人が14人といいましたが聡太君も村民です。東大の溝口さんのところの大学院生で、将来 村長になりたいそうですが、「いいはなプロジェクト」を立ち上げ、金一さんを支援している学生さんのグループです。



佐藤 聡太
飯舘村出身
東京大学農学生命科学研究科 大学院学生

佐藤聡太 溝口研究室で修士2年の佐藤聡太といっています。自分は今、7人の学生の友達と一緒に「いいはな」というプロジェクトを立ち上げました。内容としては、大久保金一さんを応援するのが目的で、実際に次の3.11までに、飯舘村で飯舘村の形をした花壇を作ろうと動いています。こ

の3.11の日に芋煮会のイベントなどを催してみようかなと思って取り組んでいます。以上です。あっ、ポスターがあるので良かったら後で見に行ってください。

田尾 仲間が今この会場にいますか？いたら手を挙げて。

佐藤 今、岸田君がどっかにいるのですけれど。

田尾 わかりました。若い人がそういうプロジェクトをやっています。次に森本さん、全村の野草を、マキバノハナゾノも含めて観測しています。



森本 晶子
ふくしま再生の会理事

森本品子 野草の状況はあちらにパネルがありますし、お手元の資料の中に私たちがやっている野草班の測定結果があります。³ 大体この5年間、最初は特にどういう形でというもなく、どんな植物がどれだけ放射性セシウムを吸収するのかという興味から初めまして、

だんだん測定していくうちに、年数を経てくると同じようなものでも放射能は減ってくる、それからものによっては大分差が出てくる、特にコケとか今頃採れるキノコ類というのは非常に高い放射性セシウムを含んでいるということがわかっています。現在では、村民の方が帰ってくるということも頭に置きまして、色々口にするような野草類とか、木の実とかキノコとか、そういうものを重点的に測定しております。結果はピックアップして載せていますので大体のことは分ると思います。詳しいところはデータベースに入れてありますので聞いていただければ分ると思います。

田尾 少し角度を変えて、小林稔飯舘電力社長さんから、どうやって地域主体の自然エネルギーを

³ 巻末資料 山野草の放射能測定5年間の記録

作るかというお話をお願いします。

小林 すみません、度々。今度は電力の話をしろということですので、今私は飯舘電力で代表をやっております。この会社は立ち上げてちょうど2年、明日が2回目の株主総会です。それで何故、こういう全然畑違いのことに進んだか、やはり除染が進んできて、帰村が現実的になってきたとき村に戻って生活するということに、逆に不安が増してきた。何をして暮らすのか、収入はあるのか、そういうことを考えたとき一番取り組みやすかったのが、再生可能エネルギーである太陽光発電。で、最初は1.5メガの計画をして地権者の同意もえて「さあやるぞ」となったときに買い取りが中断になってしまった。そこで一旦諦めたのですが、やはり有志で相談して、50kw以下であれば制限がかからないので、それを20カ所あれば1メガにはなる、それで進めよう。そこで第1号が飯舘村の特養、老人ホームの裏の土地を村から借りまして始めました。それが去年の2月ですね。それで色々な場所を探してみたのですが、該当する場所が農地しかない。日当たりが良く、電柱が側にある、今度は農地転用の壁にぶち当たりまして、約1年近くすったもんだして、最終的にソーラーシェアリングに辿り着いて、現在、5基が稼働し始めて今年中に後11カ所、合計16基が稼働する予定です。来年にまた17カ所、合計33基を設置してこまでが、第5期です。第6期がまた10カ所ぐらい計画して今年中にまた申請をしようと思っています。で合計40カ所を目標にとりあえず太陽光はやろうと思っています。分散型でやりますから、やはり農家の皆さんの帰村意欲も高まるんじゃないかな、それで少しは役に立てるし、また、地代も払うということで収入の足しにもなる、まあ、そんな思いで今やっております。今日来ていますが菅野宗夫さんにも取締役として協力していただいています。そんな訳で心強い仲間が沢山おりました2年目で赤字体質からトントン、3年目で黒字、5年目で配当と、大体これが

実現できる確率がかなり高い、私はそういうふうになるとおもっています。で、後考えている、考えているといいますが、風力・水力とかありますが、なかなかそちらは難しい。で、私が畜産で飯舘牛を復興させようとしているのは、まず電力のソーラーシェアリングと見事にマッチしまして、農林事務所に相談したときにそれならできるよと言われたときに、神妙な顔で「あーそうですか」といいましたが、内心は万々歳でした。パネルの下で牧草を作り、それを牛に与える、今度は電力と畜産の融合といいますが、これができるというのが私にとって本当に幸せなことだと思います。私の住んでいる行政区、飯舘村20の行政区ありまして、私の行政区では約70haの水田がありました。で、その水田を何に利用するか。勿論、牧草も作るのですが、その他、景観作物あるいはエネルギー作物、例えばソルガムなどを作って牛の飼料としてもバイオマスの原料としても使える、エリアンサスもですが、そういう話が今、どんどん進んできております。直ぐには無理でしょうけれども、これは村とも提携をしないとなかなか、力を仰がないとなかなかできない相談でございますので今後の課題にしたいと思います。

田尾 ソーラーシェアリングというのが出ました。これは、要するに太陽光発電パネルで農地を埋め尽くして、その下の農地が使えなくなるのではなくて、パネルの位置を高くし、パネル面積が少し狭いけれど効率は同じ太陽光発電のことです。下の農地が生かせるので「シェアリング」、それを方針に飯舘電力さんは頑張っておられるということです。

話題が色々飛びますが、今度は比叡の菅野啓一さん話していただけますか。イグネを除染して、イグネを再生し住居の放射線を下げたいという作業を私たちと一緒にやりました。



菅野 啓一
飯舘村村民
比曽地区前地区長

菅野啓一 こんにちは。
比曽の菅野と申します。
比曽地区は長泥地区のお隣にある地区で、帰宅困難地区のすぐ側です。実は、私は20数年来、基盤整備の専門の会社ですね、重機を使って区画整備をしていく仕事に携わってまして、重機専門

でした。農家も当然、年を取ってから色々な形で2町ほどの経営をやっておりまして、その中で事故が起きたということで、事故2年後に再生の会の皆さんにお知り合いになりまして、イグネの除染をやってみないかということで、第1番にその除染をやってみりました。それはなぜかというと国でやっている除染は、落葉さらい程度しかやっていない。それが住居から20m範囲内ということなんです。それでは全然下がらない。杉の腐葉土は何重にも重なって柔い土になり、それに沁みちゃっている。放射能がしみちゃっているんで、それを取り除かないとなかなか下がらないということで、その場埋めの形で埋設をしましてですね、それでなるべくならば、奥の方に、奥の方にということで、家から離れるように除染をしております。そして、はぎ取った部分は掘った土のいいところをもう一度戻してやると、これも遮蔽効果になりますので、そういう形で段々と奥の方に進んでやっております。それで昨年から今年にかけて、後ろにおられる小原先生の方をお願いしまして、放射線量を専門に色々をお願いをしまして、かなりデータの的にも下がっているということで、これは私たちが避難しているなかで、中々若い人たちが帰ってこれない、家に戻れない、これはイグネの問題だということで、これは何とかしなくちゃならない。せめて孫たちが自由に故郷に帰ってこれるように、自分でも重機を買って、重機を使いながら作業をしています。これは私たちだけではできない問題、放射線量も関係し

ますので、そういう流れのなかで先生方、色々な先生方にご協力をいただきながら、なんとか家の周りの除染は正確に下げてくださいという形にさせていただかないと、なかなか若い人たちも戻ってこれない、孫たちは当然、戻ってこない、ということになると思います。私の家では、1回だけ孫も連れてきました。それは何時かという冬ですね。私の地域は標高600mという、高い飯舘村の中でも高いところにあり、それで、なぜ連れて来たかということ、冬だから雪が降りますので遮蔽になるのです。町場に住んでいる孫たちが喜んでそり滑りをするのです。それは町に住んでいるものには思い出になるのではないか、いう風に思います。また行きたいなど今言っています。そういう形をこれからはしなければならぬと今考えています。

後もうひとつは、後ほど小原先生の方から放射線量についてはお話をいただきたいと思いますが、我々は、飯舘村は準備区域、それから居住制限区域、それから帰宅困難区域の3つに分かれています。その区域割は何だったのか、全然わかりません。というのは福島県を考えていただきたいと思いますが、ちょっと頭に三角定規を描いていただいて、一番低い部分が避難していない福島県の方々、それから準備区域、居住制限区域、それから困難区域という形を描いていただきたいと思いますが、それはいずれも同じ除染で5cmしか取っていないのです。三角定規がこういう段階に分かれますと、三角定規の最後部に行くにつれて、それだけ放射能が多く降り注いだと考えていただきたいと思いますが、それをいくらでも下げるには飯舘村はもっと倍くらいやらないと下がりません。これからの色々な形、村が、県の方々にもお世話になるかと思いますが、とにかく孫たちが楽しく故郷に戻れるようなかたちを進めたいと思いますし、これから皆さんにご協力をいただきながら、なんとか故郷の再生にがんばりたいという風に思っておりますのでよろしくお願ひします。後は小原先生の方からよろしくお願ひします。

田尾 みんな先生になってしまうのですが、「小原先生」じゃない小原さん。



小原 壮二
ふくしま再生の会理事

小原壮二 みなさんこんにちは。あの、私は先生じゃなくて、40年ぐらゐ普通のサラリーマンやって、2013年にリタイアしてこの会で活動させてもらっているものです。どうぞよろしくお願ひします。また、先ほ

ど田尾さんから紹介がありましたけれども、放射線量を飯舘村久保曾というところで測っている途中で、大きな溝に車を「つっぺって」嵌めてしまって身動きとれないところを福島市内からわざわざトラックの荷台にコンボを積んでアツという間にかけてくれた文男さんに助けてもらいました。文男さんを命の恩人と思っているものです。

ちょっと前置きが長くなりました。それで私は、菅野啓一さんと一緒にイグネの除染実験をさせていただきましたので、そこで考えていることを報告させていただきたいと思いますが、お手元の資料の20枚目⁴、それと溝口先生から紹介がありましたエンジェルルームですか、あちらの方のポスターにも同じ内容が詳しく載っております。で、このイグネの除染を啓一さんと一緒にやらせていただきますして、3つのことが重要で大事なのかなと思ひました。

最初の一つは、当然のことなのですが、どこにどのぐらゐの放射能があるかということ把握することがまず大事だと、そのためには放射線量計をもってイグネを南北に5m間隔で空間線量ををはかる、それから線量計の上部を鉛で遮蔽したコリメーターというのですがそれに線量計をつけて地表面の放射線量も測る、そこで顕著な値がでているところ、それからそうでもないところを含めて30cmの深さで土壌を抜いて2cmごとに放射能

量を把握する、これでどこに放射能が、対象のイグネなり山林にどんなかたちで入っているか、深さはどのぐらゐか、というのがわかりました。

それとですね2番目に大事なことは、実は半径10m、半径20mという形で除染をしてその真ん中に線量計を置いて、線量がどれくらい下がるかというデータを取りました。それでみると、半径10mの中心に放射線量計を置くわけですが、そこの10mの除染をすると放射線量が大変下がりました。ただ20mを超えたところを除染した場合、放射線量が下がる値は非常に落ちます。従ひまして、これから除染をする場合には、主に自分が生活する、どこに居るのか、どこで寝ているのか、どこで作業するのかをもとにして除染範囲を決める、先ほどの、どこにどれくらい放射能があるのかということ、自分の生活の範囲をみて除染計画をつくるということが2番目に大事だと思ひます。

3番目は重機を活用することが必須だと思ひました。例えば半径10m深さ10cmはぎ取って、というと大体30m³ぐらゐの汚染土が出ます。土といひますより腐葉土が主ですけども、30m³のものをはぎ取って、今、啓一さんがおっしゃいましたけれども、穴を掘って、深さ2mぐらゐの穴を掘って、そこに埋めて、客土といひますか遮蔽のための50cmの土をまた埋めるとなると、重機の活用が不可欠です。で、重機ということさらには言ひます啓一さんがさっきお話をされていひましたけれども、啓一さんは自分の手、手足のようにコンボを扱えるのですね。それだけの技術を持っていひらっしゃる、だから、重機プラス技術が不可欠だというのが3つ目の大事なポイントかなと思ひます。で、この除染実験をさせていただいたのですが、これを飯舘村の必要な村人ととてやりたいのですが、どうしたらこれが実践されるのか、実行されるのか、山林の除染にこれをどうやってつなげてゆくのかというのが大きな課題で、その点について村民の皆さんや役場、県の方々にも是非考えていただきたいなと今考えているところで

⁴ 巻末資料 里山・イグネの状況と除染の試み

す。以上です。

菅野啓一 すみません。ひとつ追加していいですか？ イグネの除染については私のところは条件が良かったんですね、平で。ただ、他の方のところでは傾斜がかなりきつい面があります。それも含めてこれから検討していかなければならない課題かなと思います。まあ、なんといいですか、遮蔽するには吹き付けみたいなものも必要だと思いますし、土砂止めにも必それが必要だと思います。色々な形で条件が違いますので、その辺はご了解いただきたいと思います。

田尾 山林をなんとかする、あるいは山林をバイオエネルギーにできるかどうかとかなどは、研究段階なのです。放射能が入っている森林を再生するということは、何らかの形で利用する必要があります。材木として果たして利用できるのかを調べるには、丸太の中に放射能がどれくらい入っているかを知る必要があります。私たちは全村に渡って丸太切りをして測っているわけです。それを材として使えるかどうかを調べています。自然の中で人間が生きるということは、山林、農業などが生活としてつながっているわけです。そこで県庁と村役場の方から、飯館電力のような産業をどういうふうに支援していくか、あるいは山林をこれからどうするか、ご意見、コメントはありませんか？

中川 村の復興に当たりましては、まずは今お話が出ております、徹底した除染ということでございます。これについては26年度から住宅、敷地、建物、農地、森林の20mが除染範囲ということで面的な部分が終わり、今年はずねホットスポット対応ということでフォローアップ除染等をやってきております。農地の除染については、先ほど土の写真の中で客土の部分がありましたが、村民の方々、農家の方々からはこの状況では、農業をやるにもできないという話がありまして、そ

れらをゼオライト、リン、カリ（K カリウム）を散布しまして、その後に耕耘までやってお返しするというのが、26年度、いや27年度ですね春から地力回復工事をするという形で進めてきたというところなんです。畝い込んでから地権者の方にお返しするというやり方ですが、後、一方、森林、再生についてもかなり厳しい状況もあるということでもあります。先ほどありましたように電離則（電離放射線障害防止規則⁵）の関係で林内の線量が時間あたり2.5μSv/hを、放射線特定化業務という名前だったと思うのですが、そういう法律の中で決められているということもありまして、厳しいという話がありました。ただ、電離則の中では週何十時間働いて年間5mSv超えるということでの制限でありますので、例えば半日とか、1日置きとかで5mSv超えなければ問題はないんじゃないの、という話も国との交渉の中ではしておりますが、法律の中をどういう風に潜り抜けて行くかというのも今後の必要な部分なのかなというふうに思っております。で、屋敷林は20m内ということで、その以遠についてはやらないということが一次諮問の中で出されたということで、村、議会ももちろんであります。県もそれらについて国に対して異議を申し立ててきた。特に森林については専門の森林組合の方からも強い要望があったということで、それらの対応ということで、今年3月に復興庁、林野庁、環境省がプロジェクトチームを作りまして、里山再生モデル事業を被災地で一応3年間実証しましょうという内容で、今、村の方でも協議をしているという状況であります。ただ、この事業自体がそれぞれの省庁の持っている事業の組み合わせということでありまして、例えば除染についてもやはり人が多く行くところをもう少し徹底した除染をしていきたい、ただ手法

⁵ 電離放射線障害防止規則は労働安全衛生法に基づき昭和47年に定められた厚生労働省令。原発事故後に除染等に従事する労働者の放射線障害防止のため、「事故由来放射性物質」に関する規定が新に設けられた。

は今までと同じ内容だという話でありますし、後、林業の方も然らばどんな風に国がやりますという話ではなくて、それぞれの自治体が計画を出しながら、それを県と国と協議をしながら内容を決めて行くということで、これらが自治体の部分で考えてということが今、里山再生事業の動きになっています。その中で、線量の制限もあるわけですが、まあそれは取りあえず脇において、まずは林内でできるものはないかということで、先ほど菅野啓一さんからあったようにですね、腐葉土まで掻き出すというのは、2次災害ということもあり、全面的に山でやるのは厳しい状況もあるかということでもあります。例えば森林再生ということで、例えば間伐材を切るとか、灌木を切って、その材料をチップ化して遮蔽なんかはどうなんだろうとか、後は森林から出てくる流出防止、これも考えなくちゃならないだろうかと、村役場としても考えているということでもあります。後はもうひとつは森林再生に、もしも村民の方々が希望していただけるのであれば、そういう制度を補助事業として作っていただいて、もし自分の裏山を再生するとか、下刈りとか灌木を切るとか、後は大きな木を切るときには森林組合等、林業家の方々に協力いただくような事業ということで、今、国と話をしている状況でございます。なかなか森林再生、難しいところがございますが、何かを考えて行かなければならないというのが現状でありますので、再生の会さんでも色々データを持っているということでもありますので、今後、色々な意味でご支援をいただきたいということでもあります。以上です。

課題3 健康に生きる

田尾 今の中川さんのお話が行政の検討事項だということでした。時間も迫っておりますので、課題3に入りたいと思います。テーマは「健康に生きる」です。飯舘村は避難指示解除を来春に予定していますが、戻る人も、戻れないという人も、

不安な方がたくさんいらっしゃいます。人間として健康に生きて行かなければならない。そういう時に仮設住宅が今後どうなるかとか、バラバラにお住まいの方が、コミュニティの再生をどうするかという問題があります。それから村が戻る人に個人線量計を貸し出しています。個人線量計で放射線をどれくら浴びるか管理していくことが必要です。それと健康の見守りを平行してやらないといけない。そういうようなことが必要なのではないかと私は思っています。広島出身者としての私は、やはり原爆手帳とまでは行かないにしても、ひとりひとりの線量と健康を責任をもって見守っていくことが重要なのではないかと思います。まず、佐須地区の菅野永徳さんから、コミュニティの再生をどうするかお願いします。永徳さんは山津見神社の氏子総代でいらっしゃるの、山津見神社のオオカミ絵の復活を中心に、精神的な問題とか安心感とかコミュニティ再生についてお話をお願いします。



菅野 永徳
飯舘村村民
佐須地区 農家

菅野永徳 菅野永徳です。座ったままで失礼します。再生の会には大変お世話になっております。山津見神社の天井絵のお話ということですが、その前に、やはり飯舘村はこれからどういう風にして人が集まれるような村にして行こうかなということを考える

必要があると考えています。

これは、何故かと言いますと、今までの飯舘村というのは、やはりその、農業をやりながら企業に勤める兼業農家が非常に多かったということ、皆さんの頭の中に置いていただきたいと思えます。先ほど、和牛とかそういうもので農業経営をするのだというお話がありましたが、そういうのはそれで良いと思います。やはり、いままで勤めながら農業をやっていたという人たちが非常に飯

館村には多いのです。そういう人たちは若い人は勤めに出て、家に残ったお年寄りの方が農業に携わってそして、今まで生活をしてきた、というのが基本にあります。それが崩れた。この事故によって避難をし、避難をしたところが便利のいいところで、便利さを求め、そして、仕事を求め、若い人たちは職に就く、そうしたときに、本当に私のようにもう77歳、78になるようなおじいちゃん、おばあちゃんがこれから家に戻ってきて「どのような生活をしていけばいいんだかな」そう考えますと、本当にやるせない、今までこの生きてきた時代は何だったのかな、そういうことをしみじみ感じているわけでありまして。そういう中から言いますと、やはり昔の歴史というのは大切だったなど考えております。

山津見神社については、田尾さんがおいで頂き、和歌山大学あるいは東京の芸大そういう先生方が山津見神社の絵の復元に携わってくれました。その時に、資金をどうするのだという話がありました。1枚が30万と高価なものでした。その絵が240枚あるのです。そういうことがあったときに山津見神社この写真は和歌山大学の先生が幸いにも残してくれた。火災になる2カ月前だと聞いています。2カ月前に撮り終わって記録として残った240枚、それが今、再現されて福島県の美術館の方で展示会をされ、今、山津見神社に帰ってきて、天井に20日に貼り終わりました。その天井を見たときに非常に感動しました。そういう歴史ある神社が飯館村にあるからこそ、年間3万人ほど神社にお参りに来るといって、非常に珍しい神社ではないのかなと、そして狼というその、その狼の天井絵を持っている神社は全国にないの



火災後に再建された山津見神社

じゃないかなとそういう話をされました。皆さんにも飯館に来たときには一度お参りをしたいと思



和歌山大学、東京芸術大学の協力で復元された狼の天井絵。福島県立美術館での展示会



再建された山津見神社の天井に納められた狼絵

います。その神社をたて（中心）に、私たちの部落、佐須部落は66戸あるわけですが、その中で、山津見神社というのは近在近郷から、あるいは海の神、あるいは野の神といって崇拜者が多いわけです。そういう中で、佐須部落の人たちが、茶屋という店を出したのです。

昔は車もなくバスもない時代で、歩いて来て一晩かかってきて、その茶屋あるいは神社に泊まる場所がちょっとあったのですが、そういうところに寝泊まりをして祈禱をしてそして、それからお祭りをして地域の人たちとお山降ろしをして帰って行ったという歴史的な大きな神社であります。

そうした中で、これからは、村もそうですが、観光として目玉として、やはり、村も宗教だという投げやりのことではなくて、やはり飯館村全域の観光地だという形の中で取り組んでもらえればよいなど常に思っています。

これからの村づくりの中で年老いた人が、小さなハウスでもよいです、帰ってきたときに農業をやるために、そのステップとして1棟ぐらい3間の10間か20間ぐらいでいいですから、そういう小さなものを各地区に準備をされて、そして年老いた人がそこで野菜を取り、そして、孫とかひこ孫とかそう人達に送ってやって、それが糧になって住民が戻って来るような、そういう歴史的な発

想をこれから持っていただきたいなど、大きい百姓もそうだかもしれないけれども、小さいところに目を向けていただきたい。

それから、これから空き家が非常に多くなるのではないかと思います。核家族になり、移住したという話になると、その空き家をどういう風にしたらいいか、村で保存してゆくのか、それとも東京の人たちに利用していただくといえますか、色々私たちでできるものをこれから考えて飯館村の発想になっていければよいな、その為にも歴史というものは大切ですよということを伝えておきたいと思います。以上です。

田尾 佐須地区にある山津見神社は、コミュニティの再生・復活という意味でも重要です。さらに永徳さんのハウスと一緒にやっているチームのリーダーであり、ふくしま再生の会の副理事長である大永さんからお話してください。共同農場のようなものを支援したい、都市住民が参加したらどうかなどのアイデアが出ていたのですが、どうでしょうか。



大永 貴規
ふくしま再生の会副理事長

大永 はい、今、永徳さんがおっしゃったように、永徳さんのお宅のすぐ隣に小さなハウスをNPO法人都市農村交流推進センターが補助金をもらいまして、小さなビニールハウスを作りました。最初は宗夫さんのところに

も一棟建てましたけれども、そこではともかく汚染された地域で、土が汚染されていても絶対に安全だということで、軽石を使った培地で野菜を作ったり、さっき、竹迫先生から話があったように明治大学から支援のために、省力化して通い農業でもやっていけるようなハウス栽培を実験的にやらせていただいています。⁶ただ今、永徳さん

がおっしゃったように、これから先、帰村が進むと本当にあすこに帰ってきて暮らすのか、それともやっぱり通い農業的なものが必要になるのか、それからさらに言えば、もう本格的な農業はやらないけれども帰ってきて、自分の生きがいのための農業をどういう風な形で、そういう形のハウス栽培の役割もあるのではないかという風な話がでております。そういう住まい方といえますか、暮らし方、あるいは生業のあり方、農業のあり方というのを村の方がどういう風に考えていらっしゃるのかということをよく伺いながら、これからの私たちの、支援というか作業の方向というのを相談しながらお手伝いする中身を決めて行きたいという風に考えています。

今一つには、この間、明治大学の農場に行ってみせていただきましたが、野菜のキットという発泡スチロールの箱の中にいれて、下に液肥をいれておけば、まったくのメンテナンスフリーで、トマトでも葉っぱでも何でもできるよというキットもございます。それから、もうちょっと大きな10坪、20坪という風な家庭菜園の延長のようなハウス栽培もあります。それから、通い農業でもやれるような、省力化した、今日明日行かなくても大丈夫な野菜の作り方もあると思います。また販路というのも生業としてやってゆくには必要になる。暮らし方の形に応じて生業のあり方に応じて、農業というのは昔のそのままに戻るといえるのはもはや難しいと思いますので、新しい暮らしの形に合わせた支援の仕方を考えて行かなければいけないというのを、我々も相談をしながらやっていきたいと思っています。以上です。

⁶ 巻末資料 ハウス栽培 これまでの活動記録

田尾 佐須地区の永徳さん宅のすぐお隣、榮子さんから、今のようなお話を聞いてどうでしょうか。



菅野 榮子
飯館村村民
佐須地区 農家

菅野榮子 飯館村の永徳さんと同じ部落から来た私、菅野榮子です。隣にしているのが同じ仮設にいらっしゃる、

菅野芳子 菅野芳子でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

榮子 同じ屋根の下で5年間、6年近くも同じ集落でコミュニティを築きながら50年間も一緒にやってきた仲間です。その中で、飯館村の貧しかった村に、何にもなかった村の村興しにも参画し、参加してきた人生でした。飯館村に生まれ、飯館の土になろうと決心していた矢先のこの原発

の事故で、聞いたこともないホットスポットという言葉のなかに、飯館村がスポット入ってしまいました。そんな中での5年間、6年間の悩み、苦しみ、淋しさは口に表せないものが多々あります。その物語、ドラマが古居みずえさんのドキュメンタリーの監督さんとの出会いもありまして、「飯館村のかあちゃんたち 土とともに」⁷という題でドキュメンタリー、90分ですけれども3月の下旬に試写会があり、その後、トントントン、テンテンテンと要請があるところには上映に行っていますので、それをご覧になった方もいらっしやると思います。そのなかには私とよっちゃん

の苦しみが、飯館村村民全体の苦しみが入っているのではないかなと、私は思っています。

孫と引き裂かれ、この原発のために家族は分断され、本当に絵にも筆にも書けない5年間を歩んできました。そういうことは経験したことがない人でないと分からないことが多々あると思います。でも私たちは、一生懸命この6年間生きてきました。その中で私とよっちゃんは同じ屋根の下に住み、隣合で同じおかずを分け合いながら一人が一品ずつ作れば2品の副食が食べられる。畑を作り、生きるっていうことに対しての、なんて言いますか、経験ですね、その、生きる、共に生きるっていうことに対してのその経験が、本当に何者にも得難いものを経験させていただいたと思って感謝しております。原発事故には感謝しませんが、この原発が事故を起こして、私たちにこの重荷を背負わせてくれたことによって、そのかけがえのない「生きる」「人間が生きる」っていうことに対しての貴重な経験をさせていただきました。これからも、残された人生を生きていかなければ私たちはなりません。その中で、孫や子供には私は遺言状は書けないと思っています。よっちゃんどうですか？

芳子 書けないです。

榮子 まあ、そんな考えを持っていますけど、私たちが人間らしく生きるということに対して、どういう生き方が本当の人間としての幸せなのか、いうことを本当に探究させて、私なりにですよ、私なりに探究させていただいた6年でした。

村に帰ろかな、帰らないかな、よっちゃんとも本当に悩みました。私は味噌もつくってきましたし、凍みもちやら飯館の食文化をそれなりにじいちゃん、ばあちゃんに教えられて、守っていかなければならないものは、子供や孫に伝えなければならぬと思ってきました。その食文化も絶えてしまう、そういう有様ですので、そういう大切なものは出来るところに行っておこうと思って頑張ってきました。味噌も凍みもちも鳴原さんにも協力させていただいて、長野県の小海町によっ

⁷ 映画「飯館村の母ちゃんたち 土とともに」、出演：菅野榮子、菅野芳子、監督・撮影：古居みずえ、製作：映画「飯館村の母ちゃん」製作支援の会、2016年/95分/HD/ドキュメンタリー

ちゃんとも一緒に行って作ってきて6年も作りましたので、もう向こうで自立してちゃんとビジネス化されています。で、「かあちゃんの家」があるところについて直売会をやって大変好評だったと喜んで、完売したそうです。そんな事業もやり千葉県を除いて首都圏の関東地方の一円で2015年には千人を30人割っただけの970人の参加がありました。3年間、佐須の味噌蔵に里親さんの味噌を熟成したところ放射能は入っていません、ということ役場に持って行って調査していただいたら、そんな結果がでましたので、佐須の味噌の遺伝子はちゃんと村に返していただきましたということになりましたけども、そんな事業に取り組んできた5年間でした。

帰ろうか、帰らないか、よっちゃん本当に迷いました。私たち人類はIAEAは1mmSv以内で住みましょう、生きましよう、世界はそういう風に決定してます。で、飯舘村はホットスポットで一生懸命除染しても、1mmSvにはならない、5mmSvで我慢しましようって、帰村宣言がされるのです。そういうところに孫を連れて帰れないことは明白でしょう。年よりばっかりが帰っていく。私はそう思ってます。よっちゃん帰る？ 帰らない？ どうする？

芳子 帰りたと思っています、今は。

榮子 「帰りた。」よっちゃんは帰りたっていうんだよね。よっちゃんは家付き娘なんです。私は嫁なんです。その違いがあって、私は関東の色々なところに味噌つきに行きましたから、その時、施設の皆さんと出会いがありました。施設からのお誘いもありましたから、日本の国のどこかであれば生きて行ける、「私は施設に行くわっ」と、そう言ったんですが、よっちゃんは？

芳子 あの… 故郷、飯舘村が恋しくて、他所さへは行きたくない、て言ったんです。

榮子 そういう訳です。で、6年間ひとりでは生きられなかったけれども、湯たんぼ抱いて寝ていた、そういう月日もありましたけど、よっちゃんと二人だったから畑を耕して二人で一人前で6年

間を婆あ漫才をやりながら生きてきました。そのよっちゃんの心を大切に、また私も「終の場所は飯舘村」と決めた人生でしたので、あの山川の姿ときれいな空気と清らかな水の流れとせせらぎと、この頭の中に刻み込まれております。よっちゃんと一緒に村に帰ることに決心しました。(拍手) 一人では生きられないけれど、二人では生きれる。そういうことを踏まえて、これからは帰ることを前提にして、村、県、国ともろもろと相談しながら年老いた後期高齢者に突入した高齢者たちが、安全と安心を担保にさせていただいて、事故のない晩年の終生、そういう人生を終わりたいと思っております。そして皆様の識見のある、学識経験者の知恵を色々ご拝借しながら、そして私たちは何もかも村のあの真っ黒いフレコンバックの中に財産はすべて、先祖代々伝わってきたものは、あの中で入ってしまいました。これから生きるということの出会いは、避難後の人と人との私たちが味噌をつくり、凍みもちをつくり、またこうして研究会に参加させていただいた先生方との出会いが、ひとつの大きな宝になりました。その宝を十分に発揮しながら、あの美しい村の再生に老いの身ながら、第1歩を踏み出したいなど、それは希望、放射能に侵されて避難させられた中での生活になんも希望はなかったけれども、今、その希望の一点を見出すことができました。よっちゃんと一緒に帰ります。

皆さんよろしく申し上げます。

田尾 どうもありがとうございます。ちょっと時間が押して休憩を取らなければいけません。再生の会で、健康や医療をサポートをしているメンバーとか、すでにお帰りを決心された菅野クニさんとか、ここでお話いただくことにしてありますが、最後の課題5のところでお話いただくことで、ちょっと10分間、休憩を取らせていただきます。

課題4 再除染を進め長泥地区を再生する

田尾 再開します。先ほど途中で終わっている部分は、課題5の方に送ります。課題4「長泥地区を再生する」というテーマで鳴原地区長さんが来られています。鳴原良友さんからお願いします。



鳴原 良友
飯舘村村民
長泥地区地区長

鳴原良友 座ってお話します。許してください。あの、田尾さんには体だけ来てくださいと言われ、体だけきて、喋れられていわれて… 私は百姓で口はしゃべりだけ、何言うか分かりません。今、脳軟化になっ

るので、行ったり来たりするので… えーと、家は、震災のとき今の規制委員長やってる田中俊一さんが、福島県で一番放射能の高いところ除染したいと、大熊、双葉といろいろ来たのですが規制されて入れない。飯舘村はその時は、規制されていないので、本当にあの人たちは原子力に勤めている人たちは分ってきたのかなど。今日に、多田先生が坊さんのような頭で何処さいますか？一緒に相当頑張ってやってもらった。8 μ Sv/h ぐらいあったのですが、家をちょっと除染したら4くらいに下がりました。皆さん、津波で飯舘村に避難してきたとき、放射能なんてチョットわからなかったです。その時、田中規制委員長が測った時には180 μ Sv/h 位、俺の家で高いところがあった、今も30 μ Sv/h というの、高いところはそれ位あります。俺の家は除染したからなんだか、3~4 μ Sv/h、いいところで2 μ Sv/hになった。家の中で。内も外も同じです。

その時（津波の時）飯舘村では避難してきた人に皆で協力しておにぎりを握ったり、私は役場に呼ばれた時に行ってみたら1200人ぐらい、1500人はいなかったと思いますが食べ物ひとつもありませんでした。イーコープとセブンイレ

ブンがあったくらいです。それも後で気が付いたのですが、長泥の公民館でおにぎりを握った時、90 μ Sv/h、その中でおにぎりを握っていた。公民館の中で、1カ月過ぎても17 μ Sv/h、そんな状態でいました。

話は飛ぶんですが、皆さんはさっき、本当に前向きな、今日、飯舘から来ている人の話でした。私のところは、何時除染してもらえるか、やるかやらないか分かりません。今度の11月の6日に国の方から指針の説明があると、やっとこの5年半以上、6年ですかもう、帰村できるとか、除染できるとかいうそんな話じゃないです。俺としては今、農業やるとかハウス作るとか、牛飼いは正直なってます。今はどうやってこの長泥を維持管理したり、将来、何とか消滅するのかなと正直今思ってます。だから今頑張ってる、バリケードの中で草を刈っていると、長泥は何やってんだ、それに私は神仏が好きなんだろうね、例大祭って白鳥神社というのがありますが、毎年、宮司さんを頼んでやってます。この5年間。この維持管理、何故やりたいっていうのだから、やってんだか、と、これは先祖、親と感謝をしたい。それに皆、今、福島の方にいたり、いろいろなところに家を建てて、暮らすんだけど、皆、東電からお金貰って保障、賠償してもらって建ててるのかなと皆思ってるのかと思うけど、俺は違うと思ってる、親だと思ふ。部落の住民、先祖に感謝をしたい、この人たちが頑張ってきたから今、俺、あの、福島に家、購入したのですが、孫と一緒に暮らせるのかなど。

もうひとつの神のことを言うと、何で神社を講ぶのかということ、これコミュニティっていうのか話し合い、昔の人はホントに困って何軒かで奉ってきたのが、コミュニティというか話し合いの原点かなと本気になって考えてみれば、その繋がりとか、苦しみとか、悲しみとか、喜びとか、そういうものが詰まっているところかなと、その原点を分れば、今、この避難してバラバラになっている心がひとつになれるのかなと、それを今、俺

としては気が付いたのは、やっぱり、さっき言ったように、人に有り難う、人に感謝をする、親、先祖に感謝をする、それがないと、今のコミュニティとか色々話している繋がりがなくなるのかなと、もうひとこと言えば、村ってか部落が無くなるのかなと。今日はあの「戻れない故郷、ながどろ」⁸という本を作ってもらって、今日は新潟大学の山中先生、ちょっと手上げてください、一所懸命に編集に当たって、新聞記者とか住民の人とか、写真家の前田さんも手を挙げて、一緒に本を作ってもらいました。今、これから復興とか何か、進んでいることを話しているんですが、俺としては今、部落をどうするのか、ていうのが今一番、頭に残って、どうやって維持していくのかなての、ハウスを作ったり牛を飼ったりというところまで行きません。何時になったら除染したり、長泥をどうするのだべ、国など村だの県だの、これからなので、取りあえず今は、村を部落を維持していくということを考えています。あと、「もどれない故郷、ながどろ」チラシとか本も玄関というかなんとか、出たところにあるので見て下さい。山中先生、俺は口下手なのでちょっとひと口、長泥のことをお願いします。



中山 知彦
新潟県立大学教授

山中知彦 すいません。想定外で頭が白くなっていますが、私はまず、新潟大学ではなく、新潟県立大学なので、訂正させていただきます

えーっと、2012年に良友さんと新潟で出会って、何ができるでしょう

かと伺ったところ、一度、現地に来てくださいますということで、こういう形になりまして、「何が一番必要ですか？」と聞いたらやっぱりコミュニティ

が崩壊しそうなのでそれをつなげる、バラバラになった住民をつなげる区報を一緒に作ってくださいということから始まりました。それで、皆さんが、特に長泥は団結力が強いと言われている地区なのだそうですが、皆さんが、一生懸命に集会のたびに多く集まっている中で、もう本当に、住んでられなくなるかもしれないから、今まで自分たちが作ってきたこの集落のことを孫に、書物としてあるいは写真集として伝えたいという希望が出てきましてそれを、外部支援者と役員と一緒に作って、昨年の5周年に向けてどうにかまとめられたという次第です。とりあえず以上です。これでよろしいでしょうか。

田尾 再生の会も嶋原さんと相談しながら、何ができるだろうかということを考えています。まずは放射線・放射能の測定を強化したい、現実の状況がどうなっているのかということを知るために、ときどきバリケードの中に入らしていただいているのですが、小原さんから報告をお願いします。

小原 小原です。簡単に説明させてください。資料は二つの画面をみていただければ分かると思います。

まず今やっていますことは左側の写真2枚に映ってます。冒頭、田尾さんから紹介がありましたが、高エネルギー加速器研究機構から貸与を受けてます高性能放射線測定器を、スズキ自動車から譲ってもらった自動車2台に積んで、毎月道路の空間線量を測ってます。



測定器を搭載した自動車

高性能放射線測定器

⁸ 「戻れない故郷 ながどろ——飯舘村帰宅困難区域の記憶——」長泥記録誌編集委員会編 芙蓉書房出版、2016年

長泥も勿論入ってしまして、長泥の測定は嶋原さんを中心に長泥の方にやってもらってます。⁹

その結果はお手元の資料の3枚目の裏側といったらいんですかね、そこにこれ飯館全体なのですが、長泥も一番下の方に長泥十字路、比曾の隣、ちょうど2011年から16年の6月までその推移が載ってます。真ん中の、それぞれの地図6枚の中に、色別に放射線量の強さの推移が表されております。それぞれの線量マップの真ん中の下、一番下のところです。比曾十字路が2011年10月のときはT路地みたいになってちょっと映ってますけれども、一番真ん中の下が嶋原さんがお話された長泥です。で、この高性能放射線量計を積んだ測定専用車で毎月、測定を行っているのがひとつです。

それから、定点観測器を嶋原さんの家の庭と、佐藤宣清さんのご自宅、これは長泥の曲田の方ですが、その2か所においてリアルタイムで放射線量の推移をデータ化しております。ここにGM管モニター、これもKEKさんから貸与を受けているものです。それを佐藤宣清さんのご自宅に置いてあります。



カバーをかけた個人線量計

解をえて、嶋原さんの生活環境というか、生活される主な場所に個人線量計（被ばく計）を一週間置きまして、その一週間の被ばく量をもとに年間の、そこに1年間居たらこれくらい被ばくを受けるというデータをとったものが

今、スクリーンに大写しされているものです。



同時にアロカを使って1時間あたりの μSv も調べています。ちょっと細かくて申し訳ないんですが、大体1時間あたり2~5 $\mu\text{Sv/h}$ のところが多くて、そこに1年間いると20~40 mSv 積算の被ばく量になるというのが現状というデータです。これらが今測定しているモニタリングの内容です。

最後にふくしま再生の会で計画している今後の長泥のモニタリング計画について説明します。ひとつは、長泥の主な水源に隣接している田圃と用水路の土壌をとって測定しようという計画です。それからもうひとつは、浪江と小宮の境目に山脈というか山がありますので、そこから派生している主な尾根を歩いてですね、森林の放射線量を測定しようという計画をもっております。嶋原さんと一緒にやっていきたいと思っています。



定点観測用GM管モニタ



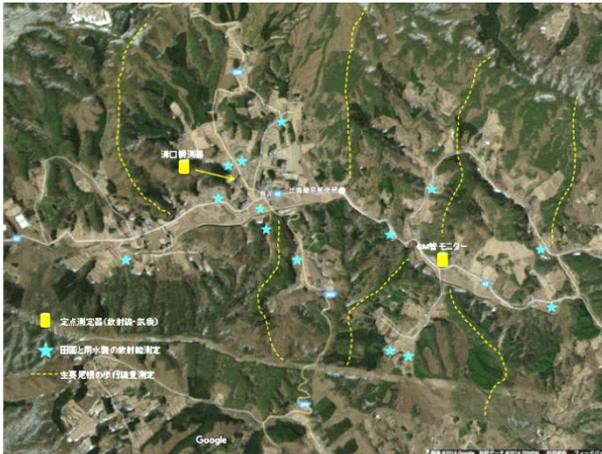
写真1

それから、この写真1ですが、これは溝口先生が開発した観測器¹⁰で放射線量だけでなく、気象状況、風力とか降雨量なども同時に記録しているものです。

それから、ことしの8月ですかね、嶋原さんの了

⁹ 巻末資料 飯館村の放射線 5年間の変化

¹⁰ クロスアビリティ社フィールドルーター



水色の星印は主な水源地別にですね田圃を特定しましてその土壌を抜こうということで14カ所を今まな板の上に載せております。それから黄色の点線が主な尾根ですね、徒歩による測定を計画しているところです。以上です。

田尾 鳴原さんの深刻なお話に対して、私どものやれることというのは、ベースになるデータをとにかく継続的に測定していく方針です。これについてKEK共通研究施設長の佐々木さんが来られています。コメントをお願いします。



佐々木 慎一
高エネルギー加速器研究機構
共通基盤研究施設長

佐々木 慎一 特に付け加えることはありませんけれども、連続モニタリングでデータを取ろうということは、非常に重要で、変化をしていくものについては非常に大切で、そういう意味では測定点を増やしてゆきたい

と思います。ここは連続測定してデータを送るのがなかなか大変で、その辺の要素を考える必要があるかもしれません。

田尾 どうもありがとうございます。帰還困難区域をどうするかということは、私どもの立場ではとても手に負える状態ではないのですが、とにかく、きちっとした信頼できるデータをとっていくということはできます。それを村民の方々、その

地区の住民の方々と共有して、なんらかの方法があるのか、それを検討してゆきたいと思います。これに関しまして、県、村の方でなにかありますでしょうか？ 長泥地区について。

中川 今、鳴原区長さんからありましたように、区域の見直しをやるときに村が3つの区域になって、そういうことで長泥一行政区が帰還困難区域になったということでもあります。ご承知のとおり、50mmを超える地域ということで、全村については20mmを超えるということで全村避難ということになりますが、その中で長泥については、50mmを超える地域ということで分かれてしまったという状況であります。それでまず、50mmというのが大体、時間あたりに公式があるものですから、それで逆算しますとだいたい時間当たり10 μ Svを超える区域という形かなということで、私も計算の中で見てきました。現状は、今お話があったように大体2 μ Svから4～5位あるのかなと思っております。高いところはまだあると思いますが、そういうなかで10 μ 以下になっているという部分で、帰還困難区域であっても居住制限区域的な対応ができないかということ、我々としては国と色々交渉してきた中ですが、なかなか実現に至らなかったという状況であります。で、長泥の行政区の中で、環境省の方でモデル事業という形で、今の公民館、集会場を除染しました。これは規制庁の方まで上がっている線量、モニタリングポストではありますが、今の段階では1 μ Sv以下になる状況になっています。また、その付近の農地10haを農水省の方で実証という形で除染をしました。で、そのところの山、庭の方は若干高いところがありますが、1 μ Sv前後で推移している状況です。そうした中で平成25年ですか、区長さんとお話をする中で米の試験栽培などもやらせていただいた、国の方、県の方のプロジェクトの中でやってきたということで、出来上がった米については基準値内という結果になってきたということです。ただその際には、溜池からの水を引

く際にですね、直接、送水パイプを使ってやってきたということがあったものですから、翌年は水路を使ってという計画があったのですが、なかなかそこも実現できなかったという経緯があります。我々としては、今後、国の方針の中で決める中でありますが、帰還困難地域についてはそれぞれの自治体の拠点を整備するための除染をするということが打ち上げられております。そういう意味では、村内の一か所の長泥がその拠点ということを、国の方でどう考えていくのか、後は拠点でないところの行政区の部分をもどのように考えて行くのかが、今後の課題なのかなと思っております。先ほど、11月6日にですね、それらの方針について国の方から説明があるということですので、村もそうではありますが、地元の方々とも色々な話をしながらですね、今後進めなければならぬかなと思ってるところであります。以上であります。

課題5 これから5年 までの村づくりをどう再生するのか

田尾 どうもありがとうございます。嶋原さんのお話のように、長泥地区は20ある行政地区のなかでひとつだけ帰還困難地域で、帰還できないバリケードのなかです。私たちも嶋原さんとご一緒にないと入れないとか、色々、制約があります。住民の方々とコミュニケーションをとりながら、客観的なデータはどうなっているかということ信頼ある形で一緒に測定をし、その過程で色々な施策を考えていきたいと思っています。非常に難しい状況に、嶋原さんがいらっしゃるといのが、さっきのお話で皆さんに分かると思います。今後、コミュニケーションを強くしながらやって行きたいと思っています。

さて、課題5の中で全体を収斂して行きたいのですが、時間もかなり押しております。課題の5「これから5年 までの村づくりをどう再生するのか」です。長泥を除く来年の避難指示解除があり

ます。長泥も含めて今後、私たちとしては飯館村全体がひとつですから、ひとつの飯館村として再生に向かっていただきたいと思います。これから5年、どうやって行くのか、比曽地区の菅野義人さんからお話をいただきます。私たちがうかがう中で比曽地区も非常に困難で、主要なところに黒いバックが積みあがっている、そんな中で義人さんが立派なご自宅を修復されたわけです。義人さんから、比曽をどうするか、村全体としてはこういう風な考え方ではないかというお話をいただければと思います。



菅野 義人
飯館村村民
比曽地区 農家

菅野義人 こういう形で今、色々とお話されていますが、それぞれの今置かれている状態が全く違うのですね。村全体としてどうするのかというお話は、もしかすると、一人ひとりに当てはまらないかもしれません。そう

いう上で私がお話したいことが2つあります。まずひとつはこの、避難指示解除ということで帰村をされる、という政策なのです。私は飯館村の場合は帰村率を上げる政策がやはり必要なだろうなという風に感じています。それぞれが、それぞれの考えによって新しい場所、あるいは村に戻っていいとされていますが、やはり飯館のような農山村は、ある程度周りに人がいないと、戻った人たちの生活の環境がなかなか整わないというのが現実なんです。ですから、いわゆる避難指示解除だけでなく、もっと人を多く戻すための政策を取っていくというのがまず必要なだろうな、それは国の政策とは違って、やっぱり村の政策として、やっていく必要があるのではないかと感じます。後は、よくコミュニティという話があります。コミュニティというのはお互いに顔見知りだからコミュニティがあるというのではなくて、やはり、生活の舞台を一緒にすることがコミュニ

ティの大きな根幹ですね。そういたしますと、私は失われた地域を再生するためにはやっぱり、地域の主体性なり自主性なりに任せた再生の方法を取ればいい、と考えています。まあ、村の方でも国に対して交付金を使って村の判断で色んなことができるようにしてくださいという要望をしています。それをもっと小さくして、それなりの行政区の単位の中で自分たちの村に戻った人と戻らない人とのコミュニティをどうするのかというのも、その使い方もその地区に任せてそういう中でコミュニティが再生するようになる、そんな風に思います。6時半から宴会です。急ぎます。後もうひとつだけ。農業の再生。私は先ほどお話いたがいた牛にしても施設野菜にしても、やっぱり村の中にトップランナーは必要だと思います。色々、制度を活用してとにかく村の中でできる農業に挑戦してもらおう。これは必要なんだろうと思います。ただ、私は今、自分の農地を見ると啞然としてしまいます。今まで石のなかったところに石があり、そして非常に水捌けがよくていい田んぼには、ちょっとした雨で水が溜まる。溝口先生の展示の中にありました、土を掘ってみると2つのコブがある。要するに表面も硬いしその下も硬い、こういう土を何とかしないと私は農業の再生はできないなって風に思っています。農業の再生の前にやっぱり農地の再生を自分ではやりたいし、これをしっかりやることで、やがて自分の息子が戻ってこれる素地ができるのではないかと、そんな風に考えています。この事業は、なかなか農家の個人だけではできない。勿論、農業をやりながらもできますが、農業を始める前にやっぱり、本格的に何年かかけてそれをやると、それが私よりもっと点から面に広がる政策としてそういうのが必要ではないかと考えております。そうは言っても私にはなんの権限もございませんで、自分でできるところからやっていきたい、とこんな風に考えております。すみませんでした。以上です。

田尾 村の政策としてやるべきだ、地域の主体性

をもってやって行くべきだというお話だったと思います。私たちも比曽の集積された黒いバックを見ると、啞然として、どうするのか、考え難いところがあります。これから長い時間がかかるかもしれませんが、皆さんと一緒に団結してやってくれればと思っております。このようなお話のなかで菅野クニさんからお願いします。



菅野 クニ
飯館村村民
宮内地区 合同会社
ニコニコ菅野農園代表

菅野クニ なんかパスしてくれるかと思ったらそうはいかなかったですね。実は私はこの東大の農学部に入ったのは2回目です。何とか行きたいなと思いながら参加させていただきました。一回目は平成15～16年の3月だったと思います。な

んで来たかという、実は私の舅が、森の名人100人の中に平成15年度に選ばれました。高校生が聞き語り甲子園で森の名人に聞いて書いていくのです。その表彰式が弥生講堂でありました。そんな舅が今回、避難という形になった時に、この舅の元気な姿を、避難しても元気な姿で飯館に返したいなと思いました。そのためには何をしなければならぬかと思ったときに、森の名人はやっぱり森の名人なのです。彼のやってきたことを、そのまま続けさせて、帰ってきてそれができるよと言ってあげることが、私は今年90歳になった舅に対してのやれることかなと思って、避難生活が何年になるか分からないけれど、そこを目標にやってきました。そのためにやってきたことが、森の名人の中の森の恵み部門、山菜名人です。山菜を30年以上かけてやってきた、この年寄りの生きがいに、山菜を取れなくしてがっかりして多くの高齢者の方々が飯館に帰ってもすることがない、楽しみがないといっているのです。その中で我が家のおじいさん、なんの心配もなく食べているのです。主治医から言われているのです。

「菅野さん、よく湯がいて食べれば山菜食べれっからな」と言われるのです。ま、その前に「食べるよ」という話なのですが、そんなこと、そのキッカケになったのが、私は再生の会とはあまりご縁がなかったのですが、実はICRPのダイアログセミナーにずっと関わって、これも実は宗夫さんの代打で出た会がキッカケなんです、その会の前に村で山菜の放射能を測ったら、ごごみ、事故の翌年5月に3300Bq/kg、同じ畑にあった行者ニンニク880Bq/kg、ごごみと行者ニンニクの間にあったウルイ、実はNDだったんです。私はこのNDというのを見た時に希望を見いだしたのですよ。これって、帰れるじゃない、食べられるじゃない、これを継続的に調べて行くことによって、なにかもっと面白いことが分るかもしれない。そしてICRPの先生方にこれをなんとか測る方法、村では1回2点しか測れない、もっと家の山にたくさんあるのですよ、これを測る方法、先生、これを何とかできませんかというところで、自分で測れるところを探していただきました。そんな形で自分で測定してきた結果、嘘をついているのではなくて、自分で現実に測った結果を見た時に、「アッ、これがそういうことなんだ」というヒントになりました。それで私は村の帰還に向けて、是非村民が自ら測れる器械を導入してください、それを何度も何度もお願いしてきました。それがようやく10月に入ったんですね。課長さんネ。私は役場の職員でもないし、——元県職員ですが——県職員も辞めてますが、一市民としてやれることで自分の中にあるのはそういうことかなと、それから、もうひとつお話ししたいことはですね、イグネの除染についてはたくさんの報告があります。そして伐採した木にこれくらいの線量がこれくらいあるという報告があります。でも、私は自分の家のイグネの木を見た時に涙がこぼれました。屋敷周りの除染は「あー、きれいになってよかったな」と思ったのですが、この切られた木を見た時に涙がこぼれました。それは夫が生まれた後に、実は、おばあちゃんの親、実家の

おじいちゃん、おばあちゃんがその杉の苗を持ってきて植林した杉なのです。それを両親と夫が育ててきた木なのです。いくら線量を下げるといへ、この切られた木を見た時に涙がこぼれました。1年や2年でもどる木じゃないのです。65年かかった木、これを、「この苗は将来、家を建てる、何かのときに売ってお金の足しにしる」とおじいちゃんが孫のために植えた木がこのまま朽ちていくのは情けなかったのです。そして樹皮を剥けば大丈夫だという話、杉のどこにどう含まれるか、そういうデータが再生の会にもありましたし樹皮を剥いたら使えるのではないか、でも使ってくれるところがあるのだろうか？ そう思っていたところに、実は私の家で改築するためをお願いした業者さんが「えーっ、そんな木があるんですか、使いましょう」って言ってくださった。そこで多田先生を通して、実は東大で測ってもらっています。300本の木を使って、柱も壁も木（角材）です。ですから周りは汚染された木だらけの壁なのです。そこで年間暮らすとプラス0.07mmSvのプラスです。これってそれでも黒じゃないかという人もいるし、なんだ誤差の内、ほとんど変化ないじゃないかという、これはそれぞれの人の考え方です。でも私はそのデータを見た時に、なんの心配もなく住んでいける。私はそれをお願いした理由がふたつあります。ひとつはどんなにしても、もうゼロには戻りませんから、そしたら安心、安全を確認するには、データしかないと思っています。

私はここでだから言っちゃいますけれども、あの震災の翌年ですね、私は内部被ばくがどのくらいになるかという知識があったら、3300Bq/kgのコゴミも食べたんだけどなって、食べなかったのは悔しいなと今でも思っている。ということは知識って、生活をもっと楽しめる武器になるんじゃないかなと私は思っているのです。もうひとつそれはデータを重ねて行けば、回りからいろいろ言われた時の盾になると私は思ってきました。ですから、家を建てたら、必ず「あんな汚染され

た木で危ないよな」と言われることも、きっとそのデータが「なんだ、安心して住めるんじゃないの」と。それに対して私は、人が集まってくる家、「あーっ、ここでいいね」と言ってくれる人が集ってくる。そして、飯館のことが世界に発信できる場所になりたいなど最終的には思ってきました。ですからコミュニティの場所であり、情報発信の場所でありたい。そしたら昨日、一昨日ですね、私の友人がやって来て二度目の宿泊をしたのですよ。その木だらけの木の壁のあるログハウスに泊まって友人が、「実は前回泊まったときには頭が痛くて痛くて仕方がなかった、それまで何カ月も頭痛でね。ところが、あの後、頭痛がなくなったのよ」と言いました。星空観察をしました。オリオン座流星群をタップリ楽しみました。後は実際に来ていただいて、味わっていただければいいかと思えます。どうも有り難うございます。

田尾 どうもありがとうございます。私たちも飯館の木材を使って材木を作り、実験小屋を建てて実験をやっております。空間線量はかなり低いということは確認をしています。科学的にはそうだと思いますが、利用拡大には大きな課題があります。これからもいろんな地区でフォローしてゆきたいと思っています。さっき、ちょっとパスしたのですが、中町さんから、仮設住宅での健康・医療ケアチームの報告をお願いします。会場には相澤先生と三吉先生がいます。医師であり監事・理事なのでコメントをお願いします。中町さんどうぞ。



中町 美佐子
ふくしま再生の会理事
臨床心理士

中町美佐子 健康・医療ケアチームは内科医、精神科医、看護師、管理栄養士、社会福祉士、臨床心理士、介護福祉士などでスタートしましたが、現在アロマセラピスト、整体師、タイ式古式マッ

サージをされる方などにも加わってもらっています。関心を持ってくださる人にも広く開いていて、福島在住の小学校の先生もお手伝いに来てくださったり、研究をされたい学生さんも参加しています。¹¹

訪問先は仮設住宅と、数は少ないのですが村内の個人のお宅にも参ります。飯館村村民の方が避難されている仮設住宅は9カ所ですが、その内の松川第一仮設住宅と伊達東仮設住宅にそれぞれ月1回ずつ訪問しております。松川第一仮設での活動は、健康と予防を目的とした医師による健康講話と、足もみ・マッサージ・健康相談・よろず相談といったプログラムを実践しています。先ほどお話された榮子さんは伊達東仮設住宅にお住まいで、そちらでは看護師さんの足もみ、アロマセラピーやタイ古式マッサージなどをする時間を大切にしています。利用される方にはリピーターも多く皆さんとても喜んでくださっています。チームは伊達東仮設住宅に現時点で22回、松川第一仮設住宅には17回訪問しました。

伊達東仮設住宅でも松川第一仮設住宅でも、体が十分に曲がらずに爪も切れないという方もおられます。爪切りやマッサージはリラックス効果があり、また定期的にお会いしますと、お互いの垣根も低くなりますので、普段思っておられることなどをもお聞きすることができるようになりました。最近では仮設からいずれ出ないといけなと思っていらっしゃるので、少しずつ現実味をおびた話がでてきております。帰りたくない人もおられますし、帰りたくない人、揺れている人、それぞれの話に寄り添っていくことが大切と思っています。

松川第一仮設住宅での活動でいま重点に置いているのが食です。健康講話で臨床医の立場から放射線が身体に及ぼす害やDNAを修復する食事摂取の大切さを話してもらい、そのあとに管理栄養士さんから事前に作ってもらった簡単で栄養の

¹¹ 巻末資料 健康医療ケアチーム「これからの生活環境にそなえて」これまでの活動報告

ある一品を紹介してもらい、皆さんに試食してもらっております。

さて、避難生活が終わった場合にじゃあどうするかということですが、先ほど、帰村率を上げるには、という発言もありましたが、それにはやはり安心できる健康医療体制があることが欠かせません。勿論、それは健康福祉課の方でやられると思うのですが、私どもの力が役に立つのであれば協力したいと思っています。たとえば、各地区に健康予防をも含めた見守りチームのような人を置いて、医療機関に行かないまでも、専門家に聞くことによって安心して生活ができるということもありうるので、そういうシステムを放射線の個人線量計をつけるということと合わせながら、できればいいなということは今少し考えているところです。相澤先生の方で付け加えていただけますでしょうか。



相澤 力
ふくしま再生の会 監事
医師

相澤力 付け加えるというほどのことでもないのですが、いよいよ帰村しなければいけない、放射線が普段よりも、これまでよりも少し高いところでこれから生活していく、そのために、その人たちが健康に生活していくためにどう

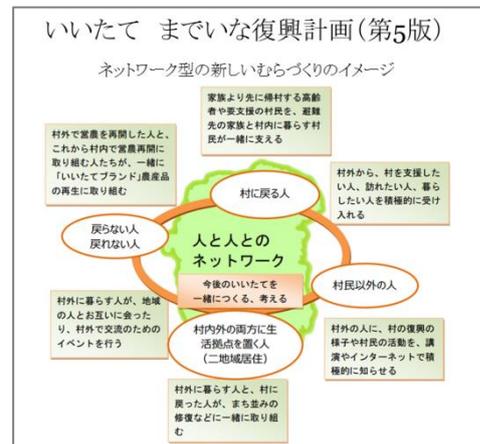
したらいいだろうか、ということで、差しあたってまず、放射線、放射線といっているけれども、もう一度放射線というのは一体どういうものか、ということをしてできるだけ正しく理解して、それを正しく恐れるということがまず必要ではないか。そして、より健康に生活するためには、やはり食事が非常に重要だというのが、私としては分っておりますので、それを皆さんにお話したいと、こういう風に思って今それを進めています。以上です。

まとめ

田尾 多岐に渡る議論になりましたが、皆さんの中から何かご意見はございますか？どうしても言っておきたいということがありますか？懇親会の時間を長くとった方がそれぞれに話ができるかなと思っていますが、よろしいですか？

ではまとめです。菅野宗夫さんからまとめをお願いします。

菅野宗夫 村民の皆さんの話それぞれを聞いていただき、共有するものもいっぱいあったんじゃないかと思っています。まったく私たちの自立再生・地域再生をするというのが、大変でもありますが大変なことだと思います。それぞれ私たちはそれぞれの考え方、対応がさまざまになりました。つまり分断されてしまいました。そういう中で、帰村が始まったら、戻る人も、まだ戻れない人も、それから二重生活をする人もいます。そういう中で村民同士が分断させられた中でありますが、今はそれぞれがそれぞれの考え方を、それぞれが認め合う。帰れない人に対しても、私が帰るのであれば、帰らない人も認めますし、当然、置かれている事情が事情ですから、そういう形でやっぱり信頼関係を持っていくというのが大事なと思います。バラバラに置かれている環境、5年半がもう過ぎてしまったのですね。そういうところを乗り越えて行くことがまず大事だなと思います。村ではこのようにネットワーク型の村創り(図)ということで復興計画を進めています。今後、住民



中心の会合を多く持ちながら知恵を出し合って進める必要があると思います。

併せて私はやっぱり交流人口というのが、大事だなと思っています。戻ってこれない家は空き家になり、住まれなくなり寂しくなる。農村風景が一変します。私たちのところには自然もありきれいなところもいっぱいありますので、そういうところの活用も含めて、支援いただく人たちとの交流、あるいは知識をもった人たち、あるいは様々な人たちが理解をしていただける人はいっぱいいると私は思いますので、そういう人たちとのネットワーク型の村づくりは私は大事だと思っています。そこまで行くのは大変ですが、やはり村民は力を合わせてやって行く必要があると思っています。今日はこのような会を開かせていただきました。やはりそれぞれの人たちが協働することの大切さがあると思っています。再生の道にはやはり欠かせないなと私は思っています。例えば行政の方々、あるいは大学研究機関の要するに専門的な分野の方々、あるいはメディア、そして産業界、そういう方々とそして村民、すべて手をつないで垣根を越えた横の連携を強くしてやって行く必要があるなど、そういうところなくして私は福島飯館村の再生はありえないと私は思っています。当面5年というのは本当にそれへの出発してゆく大事な出発点になるのかなど、そういう風に思っています。ですからこれから皆さん方の知恵を出し合ってください、それぞれ共有する問題として対応していただければと思っています。以上です。ありがとうございました。

田尾 村役場から中川さんと羽田さんが、今日聞いていただいて、ご意見をいただきました。それから県庁から戸城さんが参加していただきました。是非、農林水産部長さんたちにも、全体の意見を共有いただきたいと思っています。懇親会にもよろしくご参加をお願いします。

先ほど宗夫さんからまとめがありました。私の方からも最後に申し上げておきたいことがあります。まず、本日貴重な時間を飯館村再生の議論に割いていただいた参加者の皆さんに感謝申し上げ

げます。

本日の議論を出発点に、福島・飯館村の再生の深化に、皆様の共感、協働の知恵をいただきたいと思っています。簡潔にまとめとして3点を申し上げます。

まず第一に私たちは今日出された課題・展望、あるいは重要な論点・議論を正確にまとめるつもりでおります。パンフレットのような形で出来上がりましたら、必要な皆さんに脚色無しの資料をお渡ししたいと思っています。

第2点は、こういう課題を乗り越えるためには、正確な状況把握・事実分析のうえに解決策を創らなければならないと思っています。これがふくしま再生の会の基本的な考え方です。支援するとか支援されているとか、村民・専門家・行政などの立場の違いや壁を乗り越えなければならないと思います。精神・心の分断を乗り越えるためには、「まとめり」こそが大事であると思っています。リンカーンの言葉になぞらえれば「地域住民の地域住民による地域住民のための地域」を、飯館村で実現していただきたい。それに対して国や県、行政あるいは専門家・ボランティアが協力していくというのが非常に大事だと思います。

第3点は、私個人の考えですが、現在の社会構造と科学技術が「自然と人間の共生関係」を破壊したということが現実としてあります。その再生を目指すということは、飯館村だけの問題ではなく、福島・日本・世界を貫く21世紀の最大の課題であると思っています。自然と人間の共生関係を再生する、それを共通目標にしてやって行きたいと、ふくしま再生の会の多くの会員は思っています。

最後に、私の好きな明治45年の田中正造翁の言葉で、私のまとめと致します。

**「真の文明は 山を荒さず 川を荒さず
村を破らず 人を殺さざるべし」**

飯館村そのものに当てはまると思います。

どうもありがとうございました。 了

ふくしま再生の会 第13回活動報告会

- 主 催 認定NPO法人 ふくしま再生の会
- 共 催 東京大学農学生命科学研究科
アグリコクーン農における放射線影響フォーラムグループ
- 後 援 飯舘電力株式会社
公益財団法人 渥美国際交流財団
※三井物産環境基金 助成事業
- 開催日 2016年10月23日(日)
開会 15:00 閉会 18:30
- 会 場 東京大学弥生講堂アネックスセイホクギャラリー
ポスター展示 エンゼル研究棟講義室(13:30~18:00)
- 参加者 151名(うち飯舘村より16名)

当記録への掲載にあたり、発言者には内容の確認をお願いし、読みやすさを考慮の上、趣旨を変えない範囲で若干の修正を行った。

事務局

巻末資料

- サークルまでの活動 1
- 除染直後の松塚農地の状態 2
- 山野草の放射能測定 5年間の記録 3
- 里山・イグネの状況と除染の試み 5
- ハウス栽培 これまでの活動記録 6
- 飯舘村の放射線 5年間の変化 7
- 健康・医療ケアチーム 9
「これからの生活環境にそなえて」

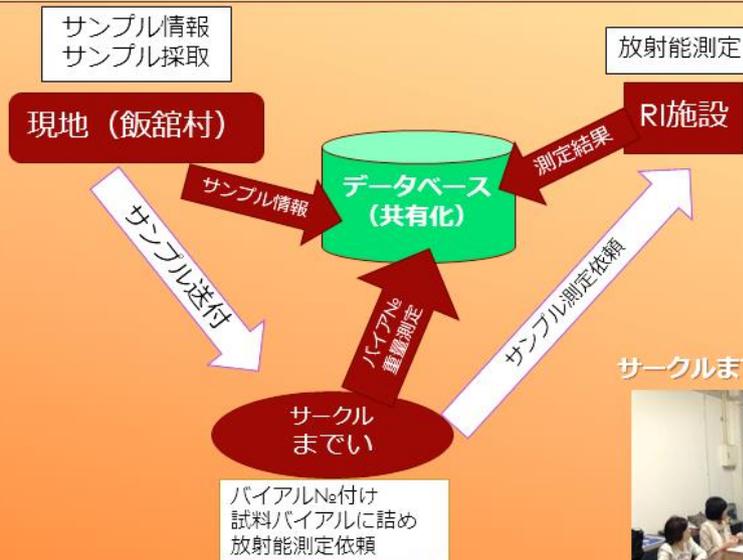
サークルまでの活動

「サークルまでい」は2012年11月から、東大の教職員・学生が中心となり「ふくしま再生の会」のメンバーと共に、飯舘村再生を支援する活動を大学内のサークルとして行っています。

飯舘村で採取した土壌(田圃、畑、イグネ等)、植物(野草、コケ、山菜、野菜、木の実等)、動物(猪、猿、ねずみ、キジ等)や試験作付米など、あらゆる試料のサンプル作成を行い、農学生命科学研究科 放射性同位元素施設 (RI施設) の研究者に放射能測定を依頼し、そのデータを蓄積してきました。現在、そのサンプル数は14,000点を超えています。

福島第1原発事故により飯舘村ではあってはならない未曾有の被害を受けました。その被害は甚大で、言語に絶するものです。私たちはその飯舘村で何とかして本来のまでいな生活を取り戻そうとして模索している村民の方々と共に考えていきたいと思っています。

データベースを活用した放射能測定の流れ (帰村後及び、帰村を考える上での生活環境情報支援)



サークルまでい室



サークルまでい勉強会の様子



稲摺り・玄米サンプルの作成



RI施設のNaI放射能測定器

農学部広報誌で紹介



飯舘村試験栽培水稲の放射能セシウム濃度報告書

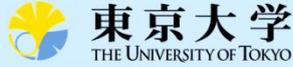


籾米の乾燥状態を観察



除染直後の松塚農地の状態

溝口勝¹・西村拓¹・久保成隆¹・飯田俊彰¹・斎藤広隆²
¹東京大学福島復興農業工学会議・²東京農工大学



amizo@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp
 desk@fukushima-saisei.jp



山田さんの放牧水田 (2016.10.20)



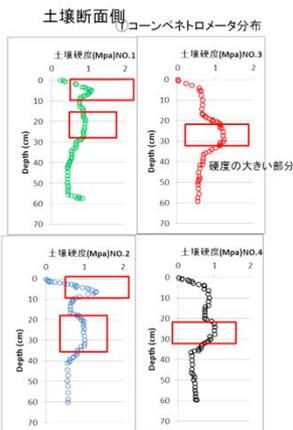
2015.06.21
 降雨
 12時 16
 13時 22.5
 14時 7
 計 45.5mm



2015.06.26 調査日

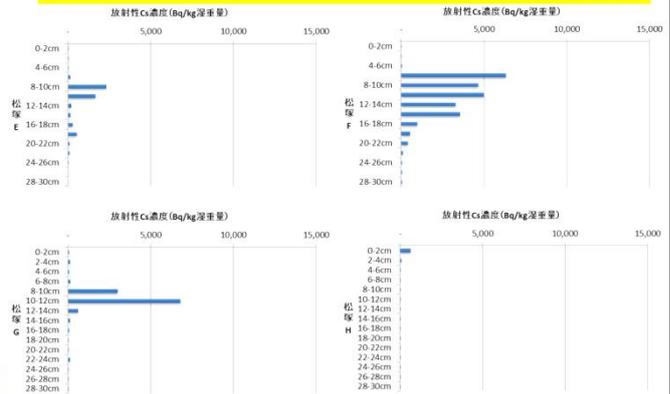


農地土壌の調査 (東京大学環境地水学研究室)

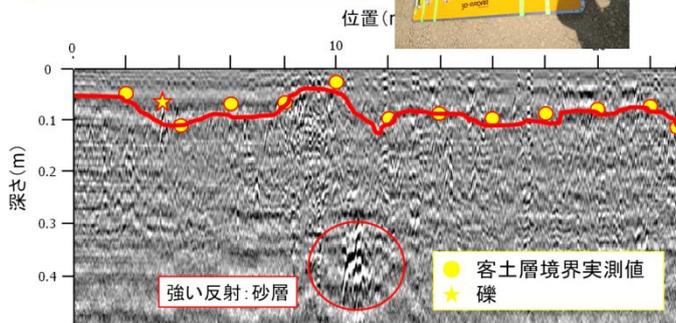


※ 表層部5cm(寄土層)で大きい硬さを示す場所がある。これは、寄土工事の遺物の塊と考えられる。それ以外の場所では、20cmから35cmで貫入抵抗が最大値を示す。これは、元々の水田の硬盤層と考えられる。35cm以下は粘土層で、水分が多いこともあり柔らかい。

松塚地区農地土壌の放射性セシウム分布 (ふくしま再生の会)



客土層厚診断 (3次元地中レーダー法) (東京農工大学) (2015.8.1)



—— 波形データから読み取った客土層境界

農業用水の調査 (東京大学水利環境研究室)



濁水時に取水を停止する

13/7/26 飯館村字都宮大学学長・副学長視察用資料
 農学部 大澤 和敏

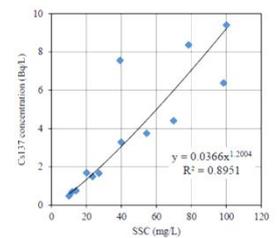


図7 比曽川のSS濃度とCa137濃度の関係

Csは粘土粒子に強く吸着され、粘土と共に河川を移動する

山野草の放射能測定 5年間の記録

ふくしま再生の会

森本晶子 染木泰子 大隅晶子

原発事故の直後、地域の放射線量が高い中、植物にはどのような影響が見られるのか調べようと始めた植物採集でした。

どの植物が放射性セシウムを吸収しやすいのか、吸収状況は経年でどう変化するかを調べてきましたが、多くの植物で年々放射能の低下が見られる一方、コケやキノコ類では村内のどの地域においてもけた違いに高い放射性セシウムが検出されます。このことから、様々な地域のコケを採取して、周囲の放射能との関連性がどうなっているのかを調べています。

最近では、ワラビ、フキノトウ、コゴミ、タラノメなどの野草類や、クリ、ブルーベリー、サルナシ等の果実や、コウタケ、アマタケ、サクラシメジなどキノコ類等、住民が自然の恵みとして口にするものを広く採取し測定しています。

また、どの場所のどの植物がどの程度汚染されているのか、住民の方々がいつでも測定結果を見られるように測定値のデータベース化を進めています。

■植物サンプルの採取と測定

- 1) 採取する前に、地表から10cmの高さで放射線量(μSv/h)を測ります。
- 2) サンプル名、採取場所、地上10cmの線量を記入したカードと一緒に写真を撮ります。
- 3) 採取してビニール袋に入れ、ビニール袋にサンプル名、採取日時を記入します。
持ち帰ってビニール袋からバイアル[®]に詰め替えます。
* 測定器にかけするための専用容器



コケは結れているように見えても水をかけると瞬間に緑色を回復します。



ビニール袋を使わずに直接50mlバイアルにサンプルを入れることもあります。

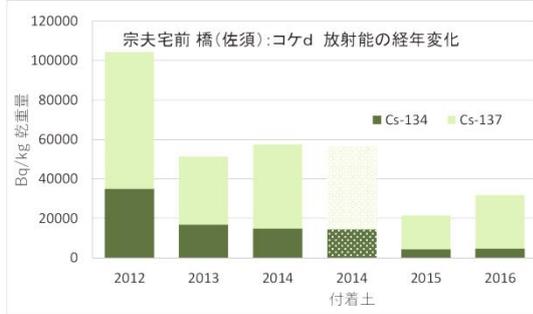
- 4) サンプルを詰めたバイアルを東大農学部“サークルまでい”に送り、データベースに、サンプルの詳細な情報を入力します。
- 5) サークルまでいでは、送られてきたバイアルの重量を測定し、放射性同位元素施設に放射能測定を依頼します。
このときの重量は、サンプルが水分を含んだままの「湿重量」です。
- 6) 測定終了後、測定値がデータベースに入力され、バイアルが返却されます。
- 7) バイアルを乾燥機に入れて、サンプルの水分を飛ばし、再度重量を測定します。(乾重量)
これで、水分を含まないサンプルの重量あたりの放射性セシウムの濃度(Bq/kg)がわかります。
結果は以下のようにデータベースに入力されます。

バイアルNo	サンプル名	サンプル詳細名	測定日	濃度 Bq/kg 湿重量			濃度 Bq/kg 乾重量		
				Cs-134	Cs-137	totalCs	Cs-134	Cs-137	totalCs
8956	野草	ヨモギ	20150605	22.97	86.53	109.51	107.64	405.43	513.07
8955	野草	フキ	20150605	25.37	95.38	120.75	167.88	631.15	799.03
8954	野草	フキ	20150605	25.19	94.57	119.76	418.30	1570.26	1988.56
8953	野草	ミツバ	20150605	46.89	175.67	222.55	341.81	1280.60	1622.41
8952	野草	ミツバ	20150605	43.24	162.57	205.81	349.78	1314.95	1664.73

■コケの放射能



測定日	2013/9/21	2014/6/28	2015/4/4	2015/10/10	2016/6/12
線量	15.0	22.5	16.6	13.3	15.2



同じ場所でも、測定値に大きな差が出ることがありますが、それは、除染や水の流れ、土砂の流入など周囲の環境変化や採取するコケの種類の違いによるものと考えられます。

コケe(佐須試験田脇の道路)
2014/6/29 90,484Bq/kg 乾重量
2014/8/31 453,279Bq/kg 乾重量



■キノコの放射能

キノコは7～9月の限られた時期にしか採取できません。2014年～2016年に採取したサンプルでは、放射能濃度がかなり高いことがわかります。経年変化を見られるほどのデータは揃っていません。



	放射能測定結果 (Bq/kg)	
	乾重量 1キログラムあたり	生重量 1キログラムあたり
イノハナタケ		
2014)	23,600	6,416
2015)	49,927	2,941
カキシメジ		
2014)	11,815	1,839
サクラシメジ		
2014)	400,340	81,480
2015)	1,507,788	118,308
2016)	58,143	1,788
ママダンゴ		
2015)	3,941	949
ハツタケ		
2015)	41,063	4,740
クロカワ		
2015)	39,566	4,646
ムキタケ		
2015)	107,324	7,791
アミタケ		
2016)	120,025	7,274

■身の回りの食べられる野草の放射能

不検出となるものもありますが、コシアブラのように非常に高い値を示すものもあります。また、食用とするには、食する部位の放射能が充分低いことが求められます。生えている場所の汚染状況、種類によるセシウムの吸収の仕方も違うため、地道に調査を続けていく必要があります。

(放射能測定値 黒:乾重量1キログラムあたり 緑:生重量1キログラムあたり)



食材として生で食べたり、調理したりするものは、生の状態での放射能測定結果を確認する必要があります。

測定値「不検出」について
ここでは試料を測定する装置の性能上、20mlバイアル中の放射性セシウムが0.5ベクレル(Bq)を下回ると不検出となります。

里山・イグネの状況と除染の試み

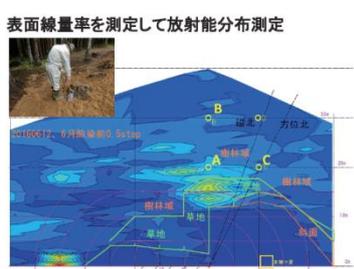
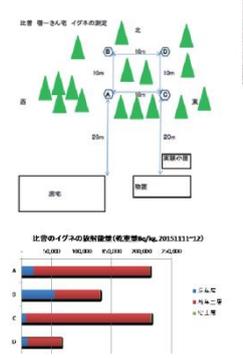
菅野啓一、小原壮二、高橋正二、ふくしま再生の会のみなさん

概要 実施場所：福島県飯館村比曾

国の除染は、家の周辺の庭に関しては剥ぎ取り除染が行われたが、隣接する屋敷林(イグネ)内に関しては落ち葉の清掃程度。イグネ内を剥ぎ取り除染し線量の低減を試みた。

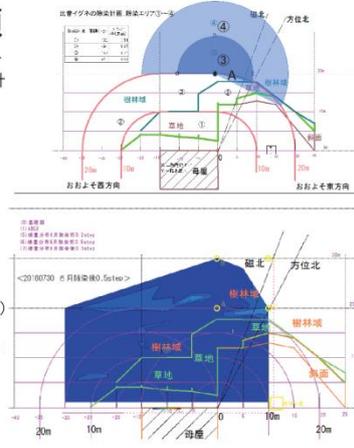


準備作業：イグネ内地面の放射能分布測定



除染作業の手順

- 除染前の線量率を測定記録する(居宅線量測定、固定線量計による連続モニター)
- 母屋の北側10m以内の除染(①)
- 西側の高線量エリアの除染
- 母屋の北側20m以内の除染(②)
- A点北側10m以内の除染(③)
- A点北側20m以内の除染(④)
- 剥ぎ取った土壌は母屋から20m以上(場合によっては20m弱)の場所に埋め込む。埋め込み穴は50cm以上の土をかぶせる

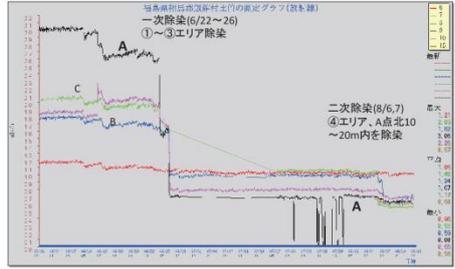


除染作業写真(2016.6.22~6.26)



線量変化：イグネ内の定点モニター記録

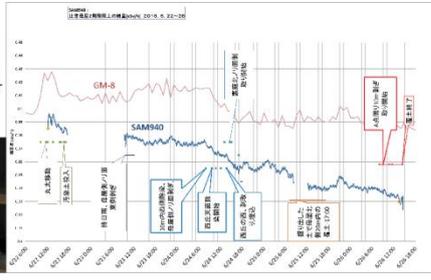
イグネ内A点に設置したモニター(1m高さ)では、
①、②(A点の南半分)の除染 2.6uSv/h → 1.6uSv/h
③(A点の北半分10m以内)の除染 → 0.7uSv/h
へと73%低減した。
半径10m以内の除染は効果が大きい。



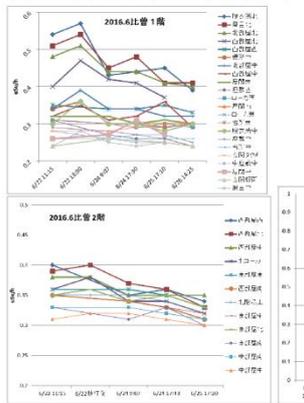
線量の変化：居室内定点測定(2階北側、一階西側)



居室内に線量計を固定し連続的にモニターした。
2階計測点では、一連の作業により線量率は0.385uSv/hから0.33uSv/hへと、約0.06uSv/hの低減が観測された。



居宅線量率測定結果

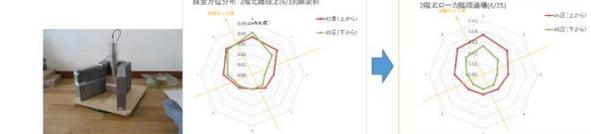


除染前、除染中、除染終了時に居室内と住宅周辺の線量率(1m高さ)を測定し除染の効果を評価した。
・1階では、北側部屋の北壁の低減が大きく、約0.1~0.15uSv/hが得られた。南寄りの部屋では±0.02uSv/h程度で変化は少ない
・2階では、西部屋、北側のロウカ、階段などで0.04~0.06uSv/hの低減が得られた。
・屋外では母屋北面での線量低減が大きく、0.1~0.3uSv/h程度であった。



更なる効果的な除染のために：

- 放射能の分布比率(地面か樹木か)の測定
2016年現在、除染前のイグネにおいては放射能の90%以上は地面にあると考えられる。
- シミュレーション計算による除染効果の予測
20mまで除染すると、直接来るガンマ線より空での散乱線が大きくなる。20m以上の除染効果は限定的になる。
- 詳細測定による線量の由来の解析(方向分布測定)



ハウス栽培 これまでの活動記録 (2013.10～2016.9) (3棟のハウス建設とクリーン野菜の栽培実証)

■通称「**宗夫ハウス**」：30坪のパイプハウスを新設。軽石を用いた点滴型養液栽培施設を導入。各種葉野菜、トマト等を栽培。汚染のない野菜ができることを確認。栽培技術共有。NPO都市農村交流推進センターと協働。三井物産環境基金支援事業。



高設型栽培施設



葉野菜の栽培



施設を一部改良してトマト栽培



スイカやイチゴにもチャレンジ

■通称「**永徳ハウス**」：30坪の既設パイプハウスを補修利用。そのほかは「宗夫ハウス」と同様。2016年1月の大雪でハウス、栽培施設とも全壊したが、復旧させた。復旧後はハウス内に養液土耕栽培も設置した。



トマトを種から栽培



一味違った野菜を栽培



2016年1月の大雪で全壊



ハウスを復旧して再開

■通称「**明大ハウス**」：40坪の既設パイプハウスを補修利用。水や肥料を遠隔自動供給する養液土耕栽培システムを導入。ピーマン、パプリカ、リーフレタス等を栽培。除染農地で汚染のない野菜栽培を確認。明治大学支援事業。



明大ハウス



自動培養液供給システム



ピー太郎、リーフレタス等の栽培



多様な果菜類の栽培試験

ハウス栽培 今後の活動方向 (飯館村民のニーズに沿った農業支援活動)

農業支援項目	具体的な支援例
(1) 「生きがい農業」の支援	<ul style="list-style-type: none"> ●小規模ハウスによる自給農業の支援（獣害対策など） ●小型栽培キットの提案と種苗提供（明大等によるサポート）
(2) 新たなハウス営農の支援	<ul style="list-style-type: none"> ●ハウス営農の支援 実証栽培で成果の得られた野菜の普及（ピー太郎、各種葉野菜等） ●繁忙期の農作業支援、生産管理（IT化など）支援
(3) 農産物の販路開拓支援	<ul style="list-style-type: none"> ●農産物の実験販売支援（会員制の産直など）
(4) 将来に向けた農業等の 実験・実証事業支援	<ul style="list-style-type: none"> ●新品種野菜などの試験栽培の展示 ●市場性の高い作目の発掘・試験栽培 健康野菜、在来野菜、希少野菜（外国品）、薬草、花きなど ●周年栽培に向けたシステム開発（ハウス暖房、培地凍結防止など） ●栽培システムの高度化（クラウド管理システム、培地水分コントロールなど） ●農業体験と営農支援を組み合わせた事業（ファーム・ステイ）の検討

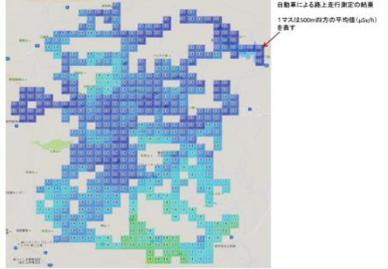


飯舘村の放射線 ～5年間の変化～

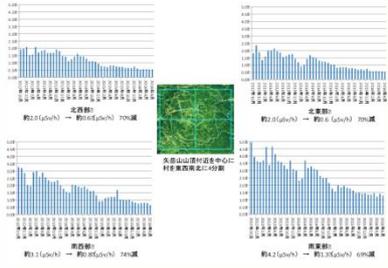
2016.10.23

車載測定：放射線量の概要

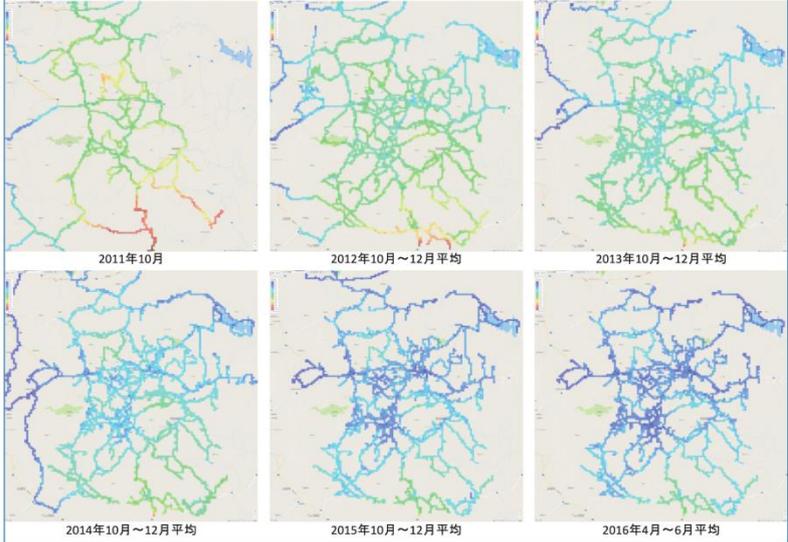
いまの飯舘村の放射線量の概要 (2016年4月～6月平均)



線量の推移 (2012年10月～2016年6月グラフ)



線量の推移 (2011年10月～2016年6月)

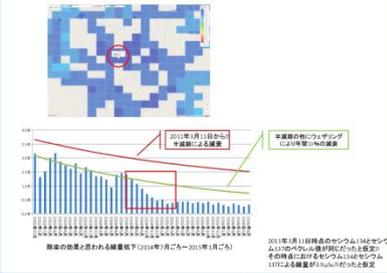


歩行測定：除染の効果と詳細な測定

農地の詳細な線量マップ (松塚: 2015年3月徒歩で測定)

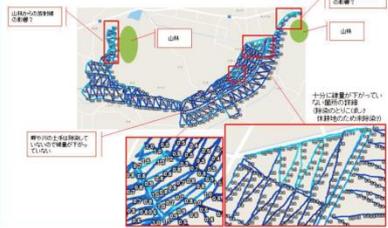


除染の効果が見える例 (松塚地区農地: 2012年10月～2016年6月の線量推移グラフ)

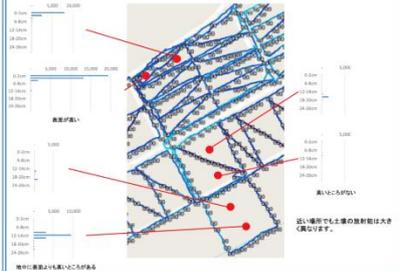


除染後に十分に線量が下がっていない箇所 (松塚地区: 2015年3月)

徒歩で詳細に測定すると、ところどころに、他に比べて線量が下がっていない箇所があることがわかります。



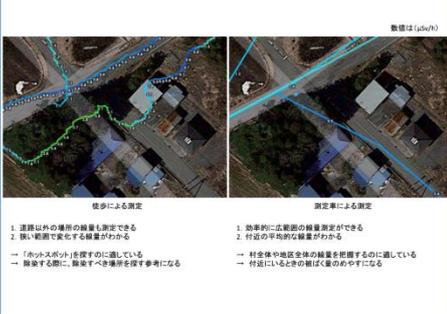
除染後の農地の土壌放射能は場所によってばらつきがある (松塚地区: 2015年3月)



地区の線量マップ (比叢: 2015年7月徒歩で測定)

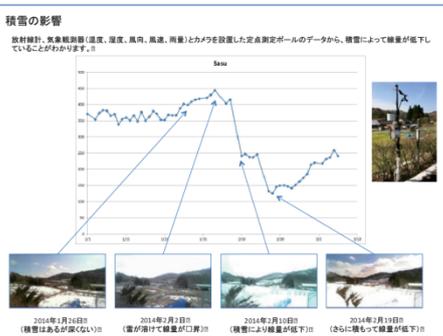
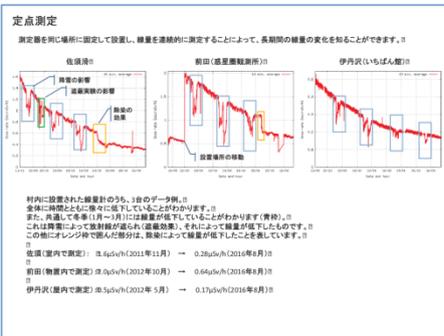


徒歩測定と測定車測定の比較 (比叢十字路付近: 2015年7月測定)

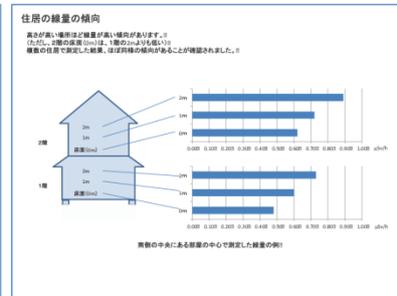
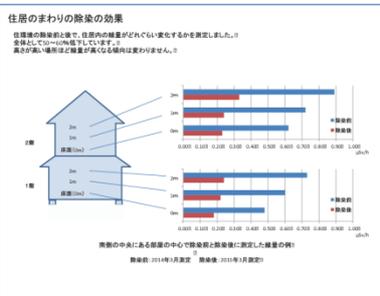
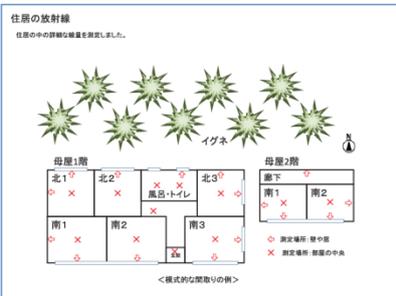


飯舘村の放射線 ～5年間の変化～

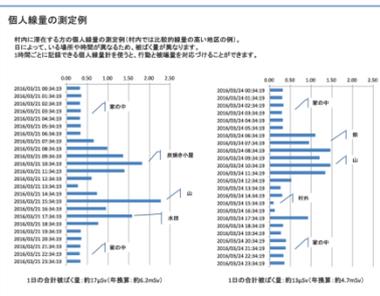
定点測定：経年変化と季節変動



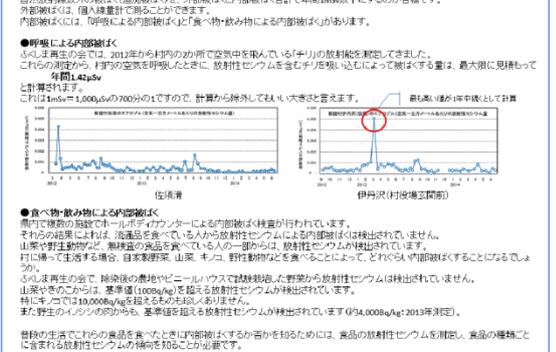
居室の放射線量



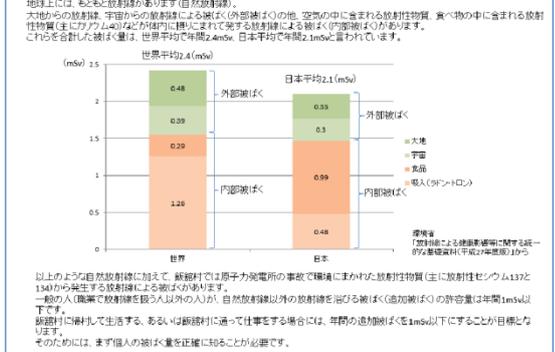
個人線量



内部被ばく



自然放射線との比較



健康・医療ケアチーム 「これからの生活環境にそなえて」 これまでの活動報告

原発事故後5年半以上たった今なお避難生活を送っておられる飯館村の人々は県内外で6,170人余り、その内9か所の仮設住宅には800人余りの方が暮らしておられます。
医療・生活支援関係者たちがチームを組み、仮設住宅の人たちと村内で暮らす人の健康に役立つと、毎月二か所の仮設住宅にお住まいの住民の方と村内のお宅をお伺いしています。

主な活動の場所：

1. 松川第一仮設住宅(162人)※人数は飯館村HP 9月1日現在の避難状況から

毎月最終週の月曜日の朝、訪問しています。集会所においでいただいた住民の方にまずに身体ほぐしをしてもらい、そのあと20分～30分、医師や栄養士さんから健康講話をします。仮設住宅にお住まいの方は、避難前までの生活と一変した狭い住宅で暮らされていることもあって、生活習慣病、特に糖尿病や高血圧、肥満等が懸念されます。日々の生活を見直し、健康維持・予防に関心を持ってもらうのを目的としています。
10時30分から「個別相談」の時間とし、医師による健康相談とマッサージや足湯・足もみ・爪切りなどを行います。
9月時点で第17回が終わり、利用された方は延べ278名となりました。

チームメンバー：

内科医・精神科医・看護師・管理栄養士・医療ソーシャルワーカー・介護福祉士・臨床心理士のほか、大学院生、海外からの訪問者もあります。

松川第一仮設住宅のみなさまへ

お待たせしました！！
7月、8月、キャンセカしました避難生活者のための「笑顔ヨガ」を開催しました。ぜひ笑顔ヨガを今年も行います。ご利用ください！！

第17回 身体とこころの健康を保つ相談会
これからの生活環境にそなえて

【日 時】 9月26日(月) 9時30分～
【場 所】 松川第一仮設住宅集会所

9時30分～ 高野快運さんと一緒に
「笑顔ヨガとPPK体操
「笑いヨガとペンペン体操で免疫力をアップしましょう」

9時30分～ 相澤先生の健康講話：
— 放射線をもう一度学ぶ —

10時20分～11時30分 ◆ 個別ケアの時間 ◆
1. 相澤先生の健康相談(お薬手帳があればお持ちください)
2. つまみマッサージ(斎藤伸彦)
3. 足湯 足もみ 爪切り フットケア(八木 松田)
4. のびのびマッサージ(石川知枝 松田)
5. 心配事 悩み事相談(北村 中野)
6. 戸別訪問 お宅にお伺いします。(ご希望の方は管理人さんに連絡ください。9時～9時半、11時半～12時にお断りします。)

※10時20分からの「個別ケア」でご利用されるご来室の準備をお願いします。(いつでもお申し込み)

1. 健康相談 () 4. お薬手帳 読み手帳 ()
2. つまみマッサージ () 5. 戸別訪問 ()
3. 足湯 足もみ 爪切り フットケア /
お灸 マッサージ ()

申込 16名前

主催 ふくしま再生の会 健康医療ケアチーム

松川第一仮設でのお知らせ

2. 伊達東仮設住宅(146人)※人数は飯館村HP 9月1日現在の避難状況から

毎月第二月曜日に訪問。午前中、足湯・足もみ・爪切りを主としたフットケアを行っています。「足もみ楽々クラブ」は今年の9月で21回目を迎えました。和気あいあいとした雰囲気、参加者の方からの冷たく冷やしたキュウリと佐須の味噌の差し入れがあったりもします。終わったとき「これで一か月また生きよう」と言われることもあって、お互い生きていることを確かめ合っているとさえ感じます。これまでに利用された方は延べ184名となりました。

チームメンバー：

看護師・医療ソーシャルワーカー・アロマセラピスト・介護福祉士が訪問します。福島市在住の女性も応援に駆けつけてくださいます。

伊達東仮設でのお知らせ

足もみ楽々クラブ 開催中!!
フットケア、爪切りいたします。

足や、ひざの調子はいかがですか？
ふらはぎをもんだり、足裏のツボ押しで、
身体はとてもしっかりになります。
月に一度ですが、続けていくとわかります。
どなたでも、お気軽においでください。

日 時：平成 27 年 2 月 9 日(月)、午前 9 時～午後 1 時
場 所：伊達東仮設住宅 談話室

♪ 私たちがお待ちしております ♪

八木優子(看護師) 菅原美穂子(看護師) 高橋愛子(アロマセラピスト) 北村有希子(介護福祉士)

毎月1回、第2月曜日に参ります。

ふくしま再生の会 健康・医療・チーム
連絡先：北村有希子 (090-7007-4736 : kitakura1501@gmail.com)
八木優子 (080-5559-6702 : ma11a@servy.ne.jp)

フットケア
足湯・爪切り
申込書

フットケア	足湯	爪切り
9時	10時	11時
11時	12時	

ご希望の時間枠にお申し込みください。お断りしたい場合は、お断りしたい時間枠に「お断り」を記入してください。お断りしない場合はお断りせず。お断りしたい場合はお断りせず。

3. 戸別訪問

飯館村内で暮らしておられるお宅を訪問しています。ご依頼があると医師・精神科医・看護師・管理栄養士などでお伺いします。現在は2, 3の地区のみですが、帰村となれば、この戸別訪問はもっと多くなると予想しています。

仮設住宅での活動内容と活動風景

松川第一仮設住宅での活動



松川第一仮設住宅



8:30 到着、集会所前では朝のラジオ体操



9:30 スタート：健康講話の前の身体ほくし。足指の体操の効果テキメンで、皆さんご自宅でもされています



健康講話：睡眠について



健康講話：管理栄養士さんによる夏バテ防止の料理実演、そのあとみんなで試食



健康相談



足湯・足もみ・フットケアでは、待っている人とも話に花が咲きます。



集会場に出てこられず身体の具合の思わしくない方のお宅を訪問し、不在であればこのメモを残します。



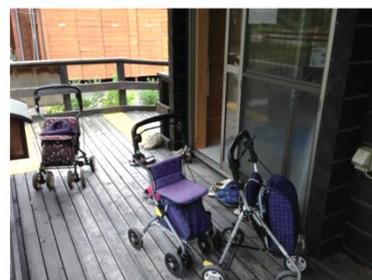
伊達東仮設住宅での活動



伊達東仮設住宅談話室



気持ちよさそうですね



シニアカートが並びます

認定NPO法人 ふくしま再生の会

東京事務所

〒166-0001 東京都杉並区阿佐谷北 1-3-6-2F1
電話 03-6265-5850
FAX 03-6265-5859
Mail desk@fukushima-saisei.jp
HP <http://www.fukushima-saisei.jp/>

飯舘事務所

〒960-1815 福島県相馬郡飯舘村佐須字滑 87

福島事務所

〒960-8042 福島県福島市荒町 4-7 再エネ合同ビル

霊山センター

〒960-0807 福島県伊達市霊山町石田字彦平 1-18